

---

# フィーリ

ふとん

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】  
フイリ

【Nコード】  
N8100K

【作者名】  
ふとん

【あらすじ】  
その城は美しかった。  
今、まさに燃えつきようとしてなお。

滅びゆく黄昏の帝国を背に、彼女は指輪と共に取り残された。  
もう帰る場所はない。

綿雪の中、彼女はひとりの軍人と出会う。

## 第一部 1 巫女

暗い綿雪を降らせる空を、煌々と紅く舐めている。

染められた情景はそれだけで全てを物語り、簡潔する。

彼女は淡く積もった雪の上で、茫然と見つめていた。

かつてこの世で最も優美と謳われた城である。白い流線型の構造、完全な左右対称、幾つもの尖塔、青と白を基調とした色合いはこの山間の国にはない海を彷彿とさせた。

枯れ枝の林の向こうにある小高い丘の上に鎮座する姿は季節を問わず美しかった。

今、この時でさえ。

分厚い暗雲を染め上げるほどの炎に包まれていてさえ。

彼女は嗚咽すら飲み下してしまう凄絶な僥倖を見つめていた。

帝国と呼ばれていた国の呆気ない末路だった。

世界で最も強大で広大な大地を統べていたはずの帝国は、属国として扱っていた小国の寄席集まりである連邦に敗れたのである。約五年続いた帝国と連邦の戦争は帝国の圧倒的兵力差で幕を開けたが、終幕に至った現在では既に帝国の部隊らしき部隊は壊滅している。全ての援軍を断たれた主都は完全に孤立し、補給もない籠城戦に突入した。一方的な侵略戦の舞台となってしまった主都は火と叫喚の渦に巻き込まれた。王城を棄て、谷合の城に落ち延びた王族達は拠点をことごとく落としてきた連邦軍に囲まれ、ついに滅びた。

上等ではあるが被せる程度の薄絹が雪の寒さを防げるわけがなかったのだ。

彼女は不意に感覚がないほど凍えた体のことを思い出し、雪の上に座り込んだままかじかんだ手に目をやる。

日に焼けたことのない白磁の両腕には豪華な宝石と彫刻の施された腕輪が重そうについている。それを見とめて彼女は失笑する。

巫女であるはずの彼女に、豪華な装飾品など必要がないのだが、神前の舞を見た王が贈りつけてきた代物だ。そして自分が逃亡する際、多くの妃達とともに、仲間の巫女や神官と共に避難民の救出に働いていた彼女を、有無を言わず連れてきたのだ。居候にも関わらず、城主に無理難題を押し付けて、現実逃避をするように毎日、遊び騒いだ。その宴席に毎回、彼女は舞を所望されて幾度も寝所にまで連れていかれそうになった。王は凡庸だった。幼い頃から他人にかしずかれることしかなかったために、外交で渡り合う、ましてや戦争で国を守ることなどではしなかったのだ。長期にわたる停滞した情勢は、優秀な側近すら王の側に置かなかった。全てが、帝国が滅ぶための下準備だったというように国の中枢から腐敗して、膨張した巨体を支えきれなくなっていたのかもしれない。

彼女は装飾品を全て体から削ぎ落とす。ネックレス、イヤリング、アンクレット、ブレスレット、髪留め、ブローチ。薄絹の装束には似あわない代物の全て取り除き、羽織っていた布でくるむ。その指に、まだ光るものが残っていることに気付いて、彼女は手を止めた。王からの下賜品とは比べ物にならないほど、何の装飾もない銀の指輪である。

光沢のある指輪を彼女はしばし見つめた。外そうと指輪を掴み、止める。

他の装飾品がどうなろうと知ったことではないが、この指輪だけは、

「おい、こんなところに女がいるぜ」

陳腐な台詞が彼女の思考を止めた。不快も露に振り返ると、五、六人の男達が軽い足取りで向かってきている。いずれも目立たない

こげ茶色の野戦服姿である。素手かナイフ一丁しか装備のない軽装ではあるが、幾つかの戦場を渡ってきた者特有の場慣れと高慢さを感じさせる。揃いの胸章は彼女が今、最も見たくないものだった。

楕円に円を囲んだ鮮やかな緑のモチーフである。

「……連邦軍……」

彼女は冷や汗を込めて小さく呟く。帝国の人間だからといって皆殺しにしているわけではない。それに彼女は巫女だ。巫女や神官は市民を誘導させるのに有効的だと生かされている。しかし、こんな戦場にたった一人きりでいる年若い巫女にどれだけ規律に忠誠を働かせてくれるのだろうか。それに着の身着のまま逃がされた彼女の格好は舞を踊っていた薄絹の軽装である。巫女の舞衣装を知らない者が見れば、どこかの娼婦にでも見えるかもしれない。

そつ息を呑む彼女の前に集まった兵士は案の定下卑た会話をし始める。

「いい肌だぜ。久しぶりの女の香だ」

「細腰だな。すぐ立たなくなるんじゃないか？」

「とりあえず女だろ。大丈夫じゃねえか？ 初めてってことはないだろ」

「綺麗な顔してやがるし、オイ、一つ連れて帰ってみるか」

帝国の常用語と連邦諸国の常用語は全く違う。まさか敵国であるはずの連邦の常用語が彼女に解るとは思っていなかったのだろう。彼らは更に続ける。

「もう主都も落ちたし、パンデモニウムも終わっただろう？ トツカナに帰営してもいい」

そこまで相談してから、兵士の一人が今までの会話を誤魔化すように彼女の前に手を差し出し、帝国の常用語で告げてくる。

「あなたを保護します。我々と一緒に来てください」

当然、彼女は手を取らず兵士を睨みつけると、兵士達にはわからないようにすぐ立てる体勢を整える。

彼女が睨みつけたのは警戒しているせいだと思ったのか、兵士は

安心させるようににこやかに笑ってさえ見せた。

彼女は装飾品を包んだ布を片手に、機会を待ってなおも押し黙る。その態度に業を煮やした兵士は彼女の肩を掴みかける。

「おい」

低い、それでいてよく透る声だった。しかし感情に乏しく、制止の声なのかただの呼びかけなのか判別できなかった。

声と共に林の奥から現れたのは、新たな一人の兵士だった。彼女の周辺を取り囲んでいる兵士達と同じような野戦服に、灰色のコートを着込んでいる長身の男である。けっして小柄ではない兵士達よりも頭一つ高い。そのくせ兵士達のような威圧感がまるでない。それは兵士達より一回りほど痩せているせいだと思われたが、この男から滲み出る緩い雰囲気によるところが多いようだ。だが、その外見は強烈だった。緋色の髪、というのは生温い。まるで鮮血を流し込んだようなピジョンブラッドの髪を前髪から後頭部に押し上げて、その目は冬空には似合わない新緑色である。灰色に見慣れた目には眩しいほどの色彩だ。

「何してんだ。撤収始まつてるぞ」

生温い男の声に、兵士達は今までのいい加減な態度を一変させて、音まで聞こえてきそうな直立不動の敬礼をした。

「は。帝国の生き残りに見える女を発見しました。いかがいたしましょう」

「女？」

怪訝そうに男は顔を歪めると、兵士達の空けた道から彼女を覗き込んでくる。

計らずも彼女は男とにらみ合いとなる。なるべく無表情に睨み返すと、男は片方の眉をわざとらしく上げた。

「女、ねえ？」

嘲笑の色を含んでいる声に、彼女は眼光を強めた。

「いかがも何も。この娘、巫女だ」

そう言われて、彼女は心の中で息をつく。この、兵士をここまで緊張させるほどの上官らしい男が言うのだから、兵士達がこのあと彼女に手を出してくることはないだろう。

「こんなガキにかまってないで、さっさと撤収を始める。第一部隊の作業は早いぞ」

ガキ。

王の覚えもめでたかった巫女を捕まえてガキと断言するこの男、生かしておくべきか。

「は。失礼いたします」

兵士達はまさしく帝国から渾名されるとおり、ジャクマール機械じかけの兵隊として最敬礼した。

男は、というと部下を待たせて彼女に横目を向ける。

「……というか、俺の記憶じゃ、部隊中に童女趣味はいなかったと思うんだが……」

帝国は負けてしまったが、せめてこの眼前の男ぐらいは仕留めておいた方がこれからの世界のためになるのではないだろうか。

そんなことを自分でも意外なほど真剣に考えるが、彼女はどうか無愛想を保った。

「まあ、それはそうなんです」

今まで一分の隙もなく敬礼していた兵士達がまるで友人にでも苦笑するように構えを解いた。これが、彼らにとって普段の接し方らしい。

「すでに城主の首も取ってしまったことですし」

一人の兵士が開放感に満ちた声で言った。それは長い戦いに終焉を見出したことによる安堵の台詞だったのだろう。

だが、彼女の無表情が凍りついた。

殺気。

どう呼んでもいい。彼女のその一瞬の感情の起伏を捉えられる者はいなかった。

「ぐあつ！」

それがいつ話した兵士の呻き声か、彼女はわからなかった。兵士一人一人に人格を貼り付けているような余裕が、彼女にはなかった。考えをめぐらせる前に兵士の一人の腹部に手刀を突き刺している。臓物を抉っていた指先を抜いて、動きかけている反応のいい次の兵士の首に向かって肘を突き入れる。喉を潰された兵士は声を出すこともできずにうずくまった。

三人目。

次の人影を探して足を振り上げた。その首を捻じ切るほどの速さに乗せた、生ける凶器は重力に逆らって一閃される。

だが、紅い残像がそれを受け止める。

手の平に軽くぶつかる音を上げて、確かに人の首根を捉えていたはずの右足は掴み取られた。

「いい蹴りだ」

彼女の足首を掴んだまま、連邦の常用語で話し掛けてきたのは赤髪の子である。思わず視線を向けると、男はわずかに口の端を上げた。

「やっぱり、俺の言葉が解るな？」

今度は帝国の常用語で尋ねてくる。地方出身者ならばこうはいかないだろう。首都圏でも稀なほど完璧なイントネーションである。

「汚らしい手を放せ。侵略者！」

初めて口を開いた彼女に向かって、兵士達は子供の遊戯でも見るように好奇の目を向けた。二人の兵士を一瞬にして倒した彼女に向ける目ではない。

男はすんなりと彼女の細い足を解放する。

「スピード、威力、技術、全部とってマルをやろう。いい蹴りだ」

何処かずれてはいるが手放しの賞賛である。彼女は余計に顔を歪めた。回し蹴りでも見舞ってやろうと思っていたが、すっかりその気を削がれている。

「とりあえず」

男は連邦の常用語に言葉を戻して優雅ともいえる緩慢な動作で毛織のコートを脱ぐと、そのまま彼女の頭に被せた。

「アンタは、俺たちが保護した、という形で主都に連れて行つてやるから」

まだほのかに温かいコートを頭から剥ぎ取って、彼女は雪に叩きつけようとするが周りの兵士に苦笑混じりに宥められる。

「凍えるよりはマシですよ」

当の男はさつさと林の奥へと向かっている。男がすでに眼前にないことを確認してから、彼女は不承不承コートを羽織った。

## 2 軍人

野営地のテントの中は意外なほど綺麗に整えられていた。

雑多な機器類はあるものの整然と並んでいてまるで違和感がなく、一台のテーブルと二脚の椅子以外目につくものはない。

差し出されたカップに手もつけず、促されるまま座した椅子の上から少女は男を睨んでいた。

この北国で暮らしてきたとは思えない格好である。せいぜい二枚の布を張り合わせたような簡単な巻き装束は、巫女の舞衣装であるが、こんな真冬の時期にわざわざ外に飛び出してくるような格好ではない。彼女も好き好んで飛び出してきたわけではないのだろうが、男から差し出されたコートをテントに入るやいなや脱ぎ捨てているところはまだ子供らしさを主張している。

まだ十六、七歳だろうか。

薄着のためにあらわになっている染み一つない白磁の肌、濡場玉の長い黒髪、上品に形作られた端正な容貌、全てを統一した華奢な体は精一杯に儚げな印象を与えるのだが、たった一つのことだけが弱いイメージを払拭する。およそ外見とはそぐわない炯炯とした緋色の瞳である。挑戦的ですからある眼光は彼女をただの美少女という言葉から遠ざけている。

対面する男はゆったりと椅子に腰掛けて自分で注いだコーヒーをのんびり味わっている。色だけを見れば派手な男である。鮮血を思わせる髪に新緑の双眸という色彩豊かで強烈な外見である。にも関わらず、彼の凡庸な雰囲気とその印象をさっぱりと無くしている。

警戒を解こうとしない少女を前にしても、マイペースにコーヒーを楽しみ、そして何か思いついたように顔をあげた。

「そっいえば名前は？」

帝国の常用語である。しかし、少女は応えようとしない。数分待った後に、男は納得したように頷いた。

「よし。名前がないなら俺が決めてやろう」

「どうしてよ！」

思わず口を開いた少女を平たく見返して、男は再度頷く。

「名前がないと、呼ぶときに面倒臭いだろう」

「そういう問題じゃないわ！」

声も猛々しく少女は立ち上がって目の前のテーブルを力任せに叩いた。少し飛び上がったカップが割れなかったのはカップの幸運の成果だろう。

「どうして、私があなたに名前を決めてもらわなくちゃならないのよ！」

苛々が着々と積みあがっている少女を軽く見上げて、男はコーヒーをすすった。

「応える名前がないんだろう？」

「あるわよ！ フィルデルシア・ツールって名前が……！」

出るに任せて答えてしまったのを悟った少女は口を曲げて押し黙る。不機嫌の度合いを跳ね上げる少女を前に、男はただ頷く。

「そうか」

落ち着き払ったその態度が少女のストレスを増長させていることに気付いているのかいないのか。男は殊更、いい加減な口調で続ける。

「じゃ、フィーリな」

「そんな不細工な略称はやめて！」

顔を歪めた少女は侮蔑さえ混じった表情で男を睨む。

「なんなのよ？ 帝国の私を捕まえてこんな場所に連れ込んで。普通、捕虜なら独居房に入れたりするんでしょう？」

「あいにくと、房は置いてなくてね。それに、ここは連邦の野営地だということをお忘れなく」

逃げられるものなら逃げてみる、というのだ。少女は今度こそ鼻白んだ。威嚇するように椅子に座り込む。

いくら少女が一個体として優秀であっても、二千人規模の部隊が三

つも並ぶという野営地を抜け出すのは容易なことではない。

「……何も知らないくせに」

今までの怒鳴り声よりも怒気の籠った言葉だった。しかし、それでも男は平然と頷いてみせた。

「名前と、巫女でガキで常用語を使い分けできることはわかった」  
確認するように並べて中身の無くなっただけのカップをテーブルに置く。

「俺にはそれだけで充分だから」

言外にそれ以上のことは興味がないと示されて、少女は歪めていた表情を少し緩めた。

しばらくカップを眺めていた彼女はぽつりと言葉を漏らす。

「……私は」

顔をあげて男を正面から見据える。

「あなたの名前も知らないわ」

「あー…そういうえば」

男はガリガリと頭を掻くと、少女を見遣る。

「エグマ・カタス。見てのとおり、連邦軍人だ」

と、男は新しい服を買ってもらった子供のようにこげ茶色の野戦服を広げて見せる。

「……じゃあ、カタスさん」

「エマー。ここじゃそれで通ってるから」

軽く伸びした男は、どうしてもよさそうに欠伸をした。

### 3 魔術師

間が抜けているほど澄んだ空だった。

まっさらな蒼穹を仰いで、大きく深呼吸する。

「フィーリ」

穏やかな女声に呼びかけられて、フィーリは視線を地上に戻した。野営地の撤収作業も終盤に入っている。既に昨夜のフィーリの寝所は一自立型貨物機関　リフト　の上にある。自分の寝袋だけを運ぶと、あとは作業の邪魔だと追い出されて手持ち無沙汰の彼女の元に、白衣姿の女性がこちらまで暇そうに歩いてくる。

「ティアナさん」

肩までのブロンドをばつさりと切り落とした童顔の女性である。

セーターに作業ズボンという色気のない格好で、さらに見る者をのんびりとさせる笑顔は女と認識させるより好奇心の強い五歳児を思わせた。このティアナが、主都につく今日までの、数日の行程においてフィーリの世話を焼いてくれたのだ。

「いよいよ主都ねえ」

彼女はこの大部隊に派遣された魔術責任者だという。大陸の果てにあるという学研都市の魔術院は各国に魔術師を派遣している。今回の戦争に至っても戦略顧問として多くの魔術師が派遣されたが、その何百人にもものぼる魔術師達を監督するために魔術院は十人ほどの責任者をつけた。

その一人が彼女、シャオ・ティアナである。

フィーリ自身、巫女という似たような隔絶社会に生きてきたが、実際に魔術師と会うのは初めてだった。

様々な場で社会に関わる魔術師だが、その実態は知らない者の方が多い。そもそも、神官や巫女の間では魔術は邪法と嫌われた。

ティアナはこの晴れた冬空に似た碧眼でフィーリを覗き込んでいる。

「どう？ 寒くない？」

問われて、フィーリは自分の格好を見回す。ティアナのセーターと作業ズボンを借りたのだが、さして大柄ではないはずのティアナの服がフィーリには少し大きい。セーターの袖口からは指先が覗く程度だ。同じく借りた安全靴も少し大きいので医療用の包帯やガーゼを詰めてもらった。だが、巫女装束よりも当然温かいので、フィーリは素直に頷いた。

「大丈夫です」

「風邪なんかひいちゃ嫌よ？ 部隊長に怒られるから」

フィーリは、数日前に会ったこの第一部隊を率いる青年を思い出す。

すらりとした長身瘦躯に流れるような物腰、それはフィーリが王宮で出会った貴族の誰よりも気品に満ちていて典雅だった。堅物の部隊長というよりも青年貴族のような外見ではあるが、彼は実に軍人らしく最敬礼で第一部隊部隊長だと名乗った。巫女だというフィーリに最上級の敬意を払い、無事に主都へと送り届けてくれることを機械的に誓約すると、流麗な容貌を揺らがせもせず冷静に告げた。“自分たちが敵であったことを忘れろとは言わないが、冷静な理解は受け入れてほしい”と。

感情に走れば、理解はない。理屈に委ねれば、妥協はない。だから、ただ受け入れる覚悟をしろ、と言うのだ。

連邦の常用語がこれほどすんなりと聞き取れたことがなかった。丁寧な言葉は国など関係ないのだ。誠意の言葉は充分に理解足り得る。あとはフィーリ自身の心一つだ。

不意に、左手に嵌めてある指輪に意識を飛ばす。

感情は言葉では片付けられないものだ。

「エマーがあなたを連れてきたんだから、エマーがあなたを連れていけばいいのにねえ？」

出したものを元の場所に、とても言うようにティアナは能天気  
に笑う。フィーリは慇懃無礼な赤髪の男を思い出してしまい、何の感  
情も宿っていないかった顔を途端に歪めた。

数日前に、この部隊の野営地にフィーリを連れてきた男である。  
彼の男は何も分からないままのフィーリを第一部隊長に突き出し、  
こうのたまったのだ。

“ガキの面倒は見切れないから、預かってくれ”  
さしもの第一部隊長もこれには一拍間を置いて、どういうことが  
と問い返した。

「第三部隊には児童館がない、なんてねえ」  
ティアナの笑い声がフィーリの回想に知らないうちに拍車をかけ  
る。

その場にいた赤髪男以外の誰もが絶句したものだ。仮にも巫女を  
捕まえてきておいて幼児扱いである。

フィーリが噴火し損ねたのは、一重に第一部隊長のおかげだった。  
彼が無愛想に頷いたのだ。

“我が部隊にも児童館はないが、巫女の身柄は丁重にお預かりする”  
ここで怒っては本当にお子様待遇を受けそうだったので、フィー  
リは殺気のこもった視線を男に突き刺しただけで事なきを終えるこ  
とにしたのだ。今にして思えば、息の根を止めておくべきだったと  
反省している。

「アレ以来、エマーはあなたの様子を見に来ないしね」  
赤髪の男はフィーリを第一部隊に預けてから一度も顔を出さない。  
顔を見たいわけではないし、むしろ二度と会わない方が精神衛生  
上、最上だと思われるのだが、拾った娘が元気なのかどうかぐら  
いは気にならないのだろうか。それともそんな僅かな繊細さを求める

方が間違っているのか。

「まあ、第三部隊は人数が多いから忙しいのはわかるけどねー」

悶々とストレスを溜め込んでいたフィーリの隣で、ぼんやりとティアナが呟く。

「……第三部隊？」

怪訝な小声が聞こえたのか、ティアナはフィーリに笑顔を向けた。  
「そう。エマーは第三部隊の部隊長さんだから」

そんな立場だったのか。フィーリは今更ながら、出会った当初の兵士達の態度に納得する。しかし、

「……あんなのが部隊長？」

第一部隊長と比べるとあまりに違いすぎた。威厳の無さにおいて、あの男は群を抜きすぎている。

「あらあ。エマーは良い男よ？」

「眼科が精神科に行かれた方がよろしいですよ」

フィーリとしては今まで世話をしてくれたティアナに真摯な忠告したつもりだったが、彼女は笑いを押さえるように手の先で口元を覆った。

「良い男じゃなあい。普段はお人形さんみたいなフィーリにそこまですんな顔をさせるんだから」

良い男だろうとなんだだろうとフィーリにとって思わず顔を歪めてしまうほど、あの男は最低男以外の何者でもない。

眉根を跡の残りそうなほど寄せたフィーリはティアナに真意を問おうとしたが、行軍を告げるサイレンが高らかに鳴った。

## 4 故郷

道程は一日に至らず、午後には主都の入り口だった場所にフィーリは立っていた。

予想はしていた。

しかし、実際にほとんど原形の残らない町並みを前にして、言い知れない眩暈を覚えた。

白の街と呼ばれた外観はくまなく煤でまみれ、倒壊した家の前で人々が茫然と立ち尽くしている。

フィーリは自分が腹の底から震えているのを感じていた。恐れではない。すでに主都には力がないことをわかつていたはずの連邦軍による街の扱いと、その連邦軍に守られてぬくぬくとしている自分に、行き場のない怒りを感じている。

第一部隊は市外警備にあたる準備を始めている。そのわずかな雑然の中、フィーリは部隊の陣営から抜け出した。

瓦礫に身を隠し、可能な限り息を潜めて見知らぬ街のように変容してしまつた街路を走つた。

人気の無い道をひた走り、何とか目につく目印を辿って主都の中心部へ、王城近くにある一神院　グレイス　を目指す。

幼い頃、預けられて以来、人生の大半を過ごしてきた神の院だ。

そこへ行けば、何かが変わるとフィーリは思い込んでいた。

奇跡を起こす、神の院なのだから。

しかし、それはフィーリの思い込みに過ぎない。

辿り着いた先には、ただの瓦礫の山しかなかった。

その周辺に、見慣れてしまつた連邦軍の兵士達が何かを調べるように無情な検分をしている。彼らの足元に何かが見えた。

数日前に見たものと同じ、真っ赤な染み。

叫んでいたのかもしれない。

兵士達がフィーリを振り返った。

獣の咆哮のような叫喚を浴びせて、フィーリは兵士達を押し退けて瓦礫の前に立った。

すう、と吊り上げられる感覚を覚えて、立ち尽くす。

眼前には折り重なるように倒れている人々がいる。

いずれの手にも果物を剥くようなナイフが握られている。装飾のついたナイフにフィーリは見覚えがあった。

「……自決の剣……」

神官や巫女に携帯が義務付けられている小さな短剣である。この剣で信仰や神を妨げる者を退ける、と教義の上ではされているが実際には護身用だった。神官や巫女は文武が求められるので、いずれも何らかの体術は心得ており、いざ院を守るとなれば強力な戦士となった。

眼前に零れているのは、フィーリが知る中では最も強く気高い神官が持っていた剣だった。

思い出に浸る前に、フィーリの中では激情が沸騰する。

気がついた時には落ちていた短剣を手にとり、手近にいた兵士に斬りかかっている。荒々しい自己流の技を身に付けている傭兵上がりなど、洗練された必殺の体術の前では赤子にも等しい。

フィーリの一閃した切っ先は確実に兵士の首を跳ね飛ばす。

はずだった。

充分にスピードの乗った腕を何者かに捕えられ、捻られる。力負けた腕は本人の意思に従わず、短剣を取り落とした。

乾いた音をたてて落ちた短剣を腹立たしささえ覚えて睨み、フィーリは自分の腕を捕える不屈き者の顔を探して険しい顔を上げた。

「まったく……」

久しぶりに聞く声だった。

思わず目を丸くしたフィーリに向かって、野戦服姿の男は殊更面倒臭そうに片眉を上げてみせる。

「どうしてそんなに雄雄しいんだろうな」

一度、目にすれば絶対に忘れられない、鮮血を模したような紅い髪  
の男である。数日前と同じ、豊かな森の新緑を思わせる双眸をフィーリに向けて、呆れたように嘆息する。

「それとも、巫女つてのはそういうものなのか？」

帝国語で問い掛けられて、フィーリはようやく男を睨み返す。彼の腕から逃れようともがくと、意外にも軽く戒めを解かれた。そのまま続けて殴りかかる気にもなれず、フィーリはそのまま男をねめつける。

「……どうしてアンタがいるのよ。エグマ・カラス」

わざと連邦語で言い放つと、眼前の男よりも周囲の兵士達は何故かざわめいた。フィーリが巫女などとは彼らにわからなかったはずだ。そのざわめきを無視して男が口を開きかけるが、

「そりゃあ……」

「フィーリを追いかけたのよ」

言葉を遮って男の後ろから顔出したのは、何も告げずに別れてきたはずのティアナだった。

「フィーリが何か慌てて何処かに行こうとしてるから、心配になってね」

同意を求めるようにティアナは男を見上げるが、彼の方は肩を竦めた。

「俺がこのお姫さまを野営地の門で見かけたって言ったら、慌てて追跡魔術を展開したのはアンタだろ」

「わかってないわねえ。こういう場合は君が心配だったから追いかけてきたんだ、ぐらいは言うもんだよ」

嬉々として語るティアナに口先で応えることすら面倒臭くなったのか、男は野戦服の上から羽織っているコートのポケットから煙草

をつまみ出して口にくわえた。

「……ティアナも……どうしてここに？」

いい加減、フィーリもティアナの世間話に付き合っではいられず、眉根を寄せて問い掛ける。

「だってねえ。フィーリが心配だったんですもの」

彼女にしては珍しく笑顔の中に苦いものを混じらせた。

「あなた、ここで育ったんでしょう？」

そうだ。

彼女には話してあった。

フィーリは巫女として、この神院で育った。物心もつかないフィーリを娘のように妹のように可愛がってくれた神官や巫女たちに育てられた。生まれた時には既に孤児院に預けられようとしていたフィーリにとって、彼らは父であり母であり、兄弟だった。大きな家族がここに居た。

だが、その家は今や原形を留めず、家族たちは冷たい地面に倒れ伏している。まるで荷物のように積み重なって。

フィーリは叫んだ。しかしそれは声にならずいたずらに呼吸困難を誘っただけだった。

急激に醒めていく。

激情も憤怒も苛立ちさえも、雪崩に追い出されるようにフィーリの体から抜けていった。

フィーリは突然、立っていられなくなって踏み荒らされた雪の上に座り込んだ。

座り込んで初めて、ここに雪が降っていたことを思う。

兵士達の間から見える家族達にも淡い雪が積もっている。

フィーリは改めて長い時間を離れてしまっていたことを思う。

茫然と空を見上げる。

透き通る空虚な蒼を見上げて、目を見開く。

目の奥が熱い。同時に痛みが走る。

始めは徐々に、次第に増していく。

どうして今まで忘れていたのだろう。

家族が死んでしまったというのに。

泣くことさえできなかった。

とうに涙は枯れている。

ただ、頭の芯が震えて熱い。

優しい人肌が、フィーリの頭を抱えた。

胸に抱かれて、女性に抱かれていることがわかった。

「フィーリ」

ティアナだ。彼女の声も震えている。フィーリは急に不安になって彼女にしがみついた。

すると嗚咽が素直に漏れた。赤子がこの世に生まれたことを嘆くような声が、信じられないほど大きく聞こえた。

乾いていたはずの涙が音量に驚愕したように流れ出た。

宥められるように頭を撫でられて、フィーリは余計に声を上げた。

「……ここで泣かしてどうするんだ」

無遠慮な声に、ティアナは少し溜息をつく。

「エマー。そんなことじゃ女の子にもてないわよ」

「――しようがないな」

周りで進められていく会話をまるで雑音のように聞き流していたフィーリの体をティアナとは別の腕が掴む。煙草の苦い匂いがフィーリの周りを覆った。

抗う隙もなく抱き上げられ、荷物のように肩に担がれる。

抵抗する腕も自分でも驚くほど力がなかった。それ以上に、背中を支える腕の力は尋常ではなかった。

やがて力尽きるとふわりと体が浮かぶ。いつもの自分の視線よりも十センチ以上は高い場所まで持ち上げられて、視界の高さに戸惑う。

「騒がせて悪かった。コレは俺が連れて帰るから」

コレ、と物扱いされても不思議とフィーリに抵抗感が生まれなかった。すでに疲れているのだ、と自分で理屈付けて、煙草臭い野戦服を掴んだ。

「は。閣下におかれましては、このような場所にご足労いただき誠にありがとうございます」

フィーリを担いでいる男は軽く手を振ってそれに応えると踵を返した。

ゆつくりと遠ざかっていく二十人以上の兵士達が最敬礼するのを眺めながら、フィーリはふと口にする。

「……閣下？」

すぐ近くに耳があつたこともあつて、男は面倒臭そうにうめいた。「エマー。会つた時にもそう言つただろ」

あくまでも名前だけを口にする男に、フィーリはぼんやりと尋ねる。

「だって、部隊長なんでしょ？」

「……誰から聞いたんだ」

「わたし」

フィーリに向かつて明るく手を上げたのはティアナだ。にこやかな彼女に向かつて、男は溜息混じりに一瞥した。

「アンタなあ……」

「これぐらいは話しておいてもいいんじゃない？」

ティアナはよくこの男がやるように肩眉をあげてみせた。

「減るもんじゃなし」

「俺の気苦労が増えるだろ」

男は彼女に何を言っても無駄だと思つたのか、再び歩き出す。

「この際だから宣伝しといたら？」

「これ以上巻き込まれてたまるか」

打てば響く。それほどはつきりとした即答だった。

「ホントに嫌いよねえ」

さすがのティアナも苦笑する。

話についていけずに黙ったまま担がれているフィーリが不気味になったのか、男が話し掛けてくる。

「落ち着いたようだな」

ふっと体を重力圏に戻されて、元の自分の視線の高さに立たされる。

急に不安になって、フィーリは男に視線を遣る。

男もフィーリを見下ろして、不審そうに眉根を寄せた。

「……どうした？」

フィーリの前に手をヒラヒラと振る。

「いつもみたたくわめかないのか？」

フィーリは充分に一呼吸おいた。

そして、悪夢から覚めたときのような顔で眼前の男を睨みつける。

「あなたのせいで疲れてるのよ！ エマー！」

怒声も終わらないうちに、フィーリは足をこれ以上ないほど跳ね上げてエマーの顎に蹴りを見舞った。

だが、エマーはそれを際どいところで避けて体をひく。的を失った必殺の一撃は空を切り、フィーリの体は空中で逆上がりする。

思わず空を掴みかけた手を指先に引っ掛けたのは眼前のエマーである。不本意にも彼に支えられる形でフィーリは無事、地面に着地した。

不機嫌に押し黙るフィーリに向かって、エマーはさして気にかける様子もなく話を進める。

「アンタは、これからどうする？」

唐突に話を振られて、フィーリは返答に詰まった。

戦争や、エマーを恨むのは容易い。

エマー達は、確かにフィーリの幸せを奪ったのだから。だが、同時に以前のフィーリに惜しむだけの幸せがあつたかと言えば、咄嗟に思いつくものがない。フィーリは無理やり王に連れられ、不本意な生活を余儀なくされていた。そのおかげで僥倖にも出会ったが、

それは夢い夢だと考えていた。

だから、フィーリは現状に惑う。

立ち止まっただけでは自分への憐れみで動けなくなってしまう。しかし、歩き出そうにも方向がまるでわからない。指針がないのだ。

複雑に歪めた表情のフィーリを覗き込んだエマーは、いつもと変わらない、冷めた口調で続ける。

「アンタが、あの城に居た巫女だろう」

あの城、と言われてフィーリは顔を上げる。エマーとフィーリが知る城は一つしかない。あの、燃え尽きるまで美しかった丘の上の城だ。だが、フィーリは問わずにはいらなかった。

「どうして……」

「俺の部隊が落としたからな。報告は受けてる」

淡々と告げられ、フィーリはますます何がしたいのかわからなくなる。

「城主の首を落とした時に、側にいた巫女に部隊の末端二十人がやられた。ちょうど精鋭の手が空いたから追っ手を出したらまんまと逃げられた」

「まー。フィーリってスゴイ特技があるのねえ」

素っ頓狂な相槌を打って、ティアナはフィーリの頭を撫でる。

わざとらしく話を反らそうとしている彼女を無視して、エマーは続ける。

「お前はむしろ、俺を恨む立場にいるんだろう」

明日の天気を告げるかの如く言われて、フィーリは他人事のように納得した。状況から言えば、フィーリはエマー達を恨んで当然なのだろう。だが、今のフィーリにそんな情熱はすでに残っていないかった。眼前にはただ、何もない現実があるだけなのだ。

「俺を恨んでいるか？」

恨んでいないといえば嘘になる。

だが、

「……わからない」

方向が定まらない。感情と行動がバラバラになって、フィーリは自分で進むことができない。

フィーリは顔を上げて、エマーを見上げる。静かな湖面を見つめているような気分になり、戸惑いを口にする。

「理屈の上では、私はあなたを恨んでいるのかもしれないけど、私は、今、何をしたいのかもわからない」

エマーが明確にしようとしているフィーリの立場はあまりにも不安定だ。

その困惑を見ていなかったのか、エマーは無関心に頷いた。

「わかった」

「……何がわかったのよっ？」

思わず顔をしかめて半眼でエマーを睨む。

「アンタが何をしたいのかわからないことがわかった」

屁理屈だ。不審顔で眉根を寄せる。

「だから、どうだっていうのよ」

「行くところがないなら、目的地を作ってやるっか」

フィーリは真意がわからず呆れも混じって聞き返す。

「は？」

## 5 旅

その街道を抜けると、すでに雪はなかった。

帝国の主都から東に街道を進めば、暖流の影響で雪は久しく見られなくなり、歩く人の格好からも分厚い毛織のコートが無くなった。冬とはいえ、森の木々には柔らかな緑が残っている。

フィーリも雪避けの分厚いコートを脱いで、汗で額に張り付いた前髪を払う。

夕暮れが近いこともあって、隣をすり抜けていく行商や旅人の足は早い。だが、彼女の歩調はゆっくりしたもので、足早に去っていく人々を見送る。

戦争というものが形だけだが終わったことで、国外に逃げていた人々が戻ってきているのだ。長旅の疲労は見られたが、その中に安堵の笑顔がうかがえる。

そんな理由もあって普段よりも多い人手が一気に戦乱から免れた街に向かえば、飽和するのは目に見える。そこで、雪の無くなってきた頃には野営しながら旅を続けている。

「おい。こつちだ」

呼びかけてくる声に従って、フィーリは街道を反れた。

緑の多い森に分け入り、小さな広場を見つける。戦争時に傭兵や小さな部隊が野営して捨てた場所だという。

そんなものを逐一覚えてるのは、この男ぐらいだろう。

フィーリは少し前を歩く赤髪の男を見上げた。エマーである。

見慣れた長身は野戦服ではない。

しつかりとした仕立ての旅装に身を包んでいる。フィーリと似たような雪避けコートを肩に掛けていれば、ただの旅人にしか見えない。背負っている袋が剣の包みに見えないこともないが、エマーはただの荷物だと言った。

街にいちいち立ち寄っても、人がこつた返しているだけだと言っ

て、野宿の旅を提案したのはエマーだった。フィーリ達は食料と燃料を買いそろえるか、少し体を休めるためだけに街に立ち寄る。手慣れた様子で火を焚く用意をし始める手際はとても数日で覚えたものではない。

出所を尋ねると、エマーは少し苦笑しただけで応えなかった。北の主都を出てから、十六日が経っていた。

行き場を失ったフィーリに、エマーは目的を与えてやると言った。その言葉が現実となったのはそれからわずか二日後。

フィーリに突然、旅装を渡して軍を抜けると言い出したのだ。理由を問うと、

“ 部隊長辞めてきた ”

とだけ応えた。結局、フィーリ達はティアナと第一部隊長だけに見送られ、早朝、野営地を後にした。

雪の降る中、フィーリはわけもわからず、だが、理由を何とか聞こうとエマーを問い詰めた。

“ どうして部隊長辞めたのよ ”

“ 戦争が終わったから ”

“ 戦争は、終わってからが大変なんじゃないの ”

“ 戦争がないんだから、もう興味ない ”

“ 無責任 ”

それまで振り返りもしなかったエマーが、初めてフィーリを顧み  
た。

その顔には珍しく笑みが浮かんでいた。とても皮肉げで、人を食  
ったような。

“ 戦争が終われば、俺は必要ない ”

嘲笑うように聞こえて、フィーリは質問を止めた。

それから十六日。

ようやく帝国の東の端までやってきた。

フィーリは目立った会話を避け、エマーの方もただ頷くだけの相槌を打つのみだ。

灯された焚き火を見つめて、暖めた携帯用のシチューを一人用の鍋から一さじすくう。喉を通すと何時の間にか冷えていた体の芯が緩やかにほぐれた。

日は沈み、森は早々と夜を迎えている。寒さが和らいできた分、今度は野生の動物に襲われる危険性も出てきた。夕食は手早く終わらせなければならない。

フィーリのはず向かいで、シチューを食べ終え、パンで食器を拭って食べているエマーがいる。そこそこ長い旅だというのに、この男に疲労の色はない。雪国にいた頃と同じような無関心さで動いている。

思えば、彼はこのところまともに寝ていないはずだ。夜は寝ずに焚き火の番をし、夜が明ければ早々に発つ。昼には小一時間ほど昼寝をするが、それで睡眠時間が足りているとは思えない。

しかし、それを当然のように行うのはこの男たる所以でもあるような気がしていた。

食器を拭ったパンの一欠けらを口に放り込むと、エマーは焚き火に注意を移した。

「早く食って寝ろ」

この十六日間繰り返された言葉だ。フィーリはさして反発もせず、手早く夕食を平らげると、コートを寝袋代わりにして地面に寝転んだ。

ゆらゆらと立ち昇る狼煙を見上げながら、その先の木々の隙間から見える淡い星を仰ぐ。

北の分厚い雪雲からは見えなかった蒼海にたゆたう星は、フィー

リにとって見たことも無い宝石をちりばめたように見えた。同時に、それが仄かな輝きを主張することに躍動する空の息吹を感じた。

確実に生きている世界がそこにあった。

そうしてフィーリは、まるで誰かに抱かれているような安心感を覚えて目を閉じるのだ。

幾時間が経ったか。

それほど時を得ていないのかもしれない。

生温い覚醒が不意に訪れた。

フィーリはうつすらと目を開けた。

音が聞こえる。

視線の先はまだ暗く、朝は遠いことを知らせる。

時々、フィーリは夜半に目が覚めた。何も考えないまま、不思議な弦の爪弾きに耳を傾けている。

点々と、流れるように、和音の少ないメロディがひたすら静かに森の静寂へ溶け込んでいく。

哀しさも、愛しさも、虚しさもない。ただ、水の中を沈んでいくような浮遊感だけがフィーリを包む。

「……この曲知ってる」

呟くと、音が消えた。

驚いて、改めて目を覚ますと細長い板に弦を張った楽器を抱えたエマーが居た。音楽は専門分野だったはずのフィーリも知らない楽器だった。

起き上がるまでは目を覚ませず、寝たままエマーを見上げると、彼はいつもの静かな表情でフィーリを見下ろす。

「さすが巫女だな」

エマーはフィーリに雑言を嫌ほど向けるが、同じぐらい賞賛も惜しまない。

意外なことに気がついて、フィーリは押し黙る。

「こんな曲、部隊中じゃ誰も知らなかった」

エマーは懐かしむように、弦の一本をはじく。

「……歌詞だけ覚えてるの」

これだ、という確信はない。

ぼんやりと思い出されただけだ。

そのくせ、曲を聴けば歌詞は言葉となって溢れようとする。

義務的に覚えている曲とは違う。

自然と流れる音楽は、フィーリにとって初めて出会うものだった。

「これに歌詞があるとはな。初めて聞いた」

エマーは楽器を脇に置いた。フィーリにはそれが何故か残念に思えた。

「……眠るまで弾いてくれないの？」

自分の口から出た言葉に少し驚いた。エマーも同様に少し目を開いた。

「……俺に子守唄でも弾けと？」

「……少しの間でいいから」

エマーは軽く嘆息すると、楽器を抱え直して弦に指をおいた。つい最近まで武器を握って人の命を奪っていた武骨な手とは思えないほど、繊細に弦を留めて弾く。

音が生まれる。

奏者によく似た、無機質で広い音が。

吸い込まれていく音と共に、フィーリの意識も夜の闇に溶けていった。

## 6 遭遇

たまたま道行が一緒になったキャラバンに泊めてもらった夜、楽器を持つっていると知られたエマーは酒に酔った人々にせがまれる形で弦を爪弾いた。

いつもの曲だったので、フィーリは宴の熱気に浮かれて舞を披露した。なるべく主都で覚えた巫女舞の技巧を使わず、知識として覚えた一般的な踊りで舞ったのだが、計らずもそれが絶賛を受けた。宴も終わり、人々が片付けもそこそこにテントへと戻っていく時、フィーリはキャラバンに拾ってくれた中年の女性に声をかけられた。「アンタ達、兄妹で楽師でもやってたのかい？」

他人から聞かれる関係を、フィーリ達は兄弟で押し通していた。

「いえ……素人です」

巫女は踊りのプロではない。嘘をついているわけではないのだ。

「それにしちゃあ、上手い舞だったよ」

手放しに褒めてくれる人は今までにも大勢いたが、こうした踊りを褒められた経験がなかったフィーリは柄にも無く照れた。

「アンタの兄さんも良い弾き手だね。兄さんも素人なのかい？」

「ええ……」

フィーリは生返事を繰り返す。エマーがどうしてあの楽器——リイラという民族楽器らしいが——を自在に操ることができるのか、フィーリ自身の疑問でもある。弾ける曲のバリエーションが多いのは、部隊の中で弾いていたことが功をそうしているのだろうか、それだけでは楽器を扱うことはできない。楽器には相性というものがあった、練習したからといって必ず上手くなるというわけではない。努力である程度まで上達しても、才能が無ければ決して到達できない世界がある。

弾くだけならば、フィーリにもできるだろう。だが、最終的で根本的なところがエマーに劣るのだ。

「アンタ達は帝国の主都から逃げてきたんだろう？」

両親を無くして当ても無く主都から逃げてきた。

それが他人に話す二人旅の事情だった。

「だからって、今、連邦に入るのは止めておいた方がいいよ」

連れて行けるところまでキャラバンと一緒にいると勧められたが、エマーがすでに断っている。

「夜盗も出るし、何より内乱が起こってる」

「……内乱？」

耳新しい情報に、フィーリは少し目を丸くした。

「何でも、連邦のお偉いさんが仲違いしたらしいよ。帝国とは違って、連邦は寄せ集まりだからねえ」

元々、連邦は帝国に対抗するために結ばれた同盟だ。その同盟も、帝国が倒れてしまった今、均衡を失うことは誰にでも予想できた。

「新政府の立ち上げもまだ本決まりしてないのに。そもそも帝国をどうするか決めてないらしいじゃないか。帝国の側でも反乱組織が出来ているらしいしね」

主都に居る頃には全く聞こえなかった物騒な話題だ。

女性と別れ、与えられたテントに入ってから、珍しく寝袋の上で寛いでいるエマーに尋ねてみる。

彼の応えは簡単なものだった。

「あー。まあそんなこともあるな」

この男はとくに知っていたらしい。

「夜盗が出るってのは覚えとけ。知らない人にはついていくなよ」

「新政府の立ち上げとか、内乱はどうでもいいわけ？ あなたの好きな戦争でしょ」

「内乱は西で起こってる。行っても面倒なだけだって」

「ものぐさ」

「何とでも」

自分の寝袋の上に座ってフィーリが顔をしかめると、エマーは傍らのリイラを引き寄せる。弦の調節をしながら、軽く目を伏せた。

「……どこに向かつてるの？」

すでに二十日が経とうとしている。その中で初めて尋ねた。聞いても素直に答えてくれるかどうかはわからなかったのだ。今、尋ねたのも、つい口について出ただけだった。

予想に反して、エマーはすんなりと応えた。

「東。知り合いの家に」

調節した弦が軽くはじかれた。

「山奥に住んでる変わり者だが、道を知ってるバアさんだ。戦争なんかに借り出されてなきゃ、連邦と帝国の間に住んでるだろう」

エマーは弦から少し顔を上げる。

「アンタの道を示してくれるはずだ。少なくとも、アンタが歩いていく方向ぐらいはわかるようにしてくれる」

進む方向がわからないフィーリに目的を与えて、その先の道も決めさせようとしている。

「……どうしてそこまでさせようと思ったの」

赤の他人の小娘に、ここまでする必要はない。

エマーはこれ以上ないほど簡潔に応える。

「約束だから」

「誰と？」

弦の調節をし終えたのか、エマーは楽器を抱き上げてのんびりと爪弾く。

フィーリはしかめ面でそれを睨んでいたが、警戒している動物が徐々に懐いていくように寝袋に寝転がる。

はぐらかされたようで、それでも心地好さを感じて、フィーリは寝そべった。

その時だった。

切り裂くような悲鳴が響く。

馬の嘶き。

叫喚。

耳慣れた惨状の音を聞いて、フィーリは夢から引きずり出されて

起き上がる。

すでにエマーの音色も消えている。

戸口でしゃがんだ彼に目配せられて、フィーリは自分の最小限の荷物を手に頷く。それを見てとると、テントの裾をエマーが覗く。

「……駄目だな。ここは」

嘆息混じりにぼやくと、フィーリを促してテントを出た。積み上げられている荷物の間に身を潜める。

いつか見た光景が広がっていた。

必要以上に明るく照らすのは燃え過ぎた炎だ。

その間を人と馬が悲鳴を上げて行き交っている。それを阻むのは大勢の武器を持った男達だ。カトラスを振り回していてもおかしくない粗暴な剣で逃げ惑う人を襲う。

中にはフィーリが覚えている顔もあった。

助けに向かおうと物陰から出て行こうとするが、エマーに腕を捕まれる。

「やめとけ。面倒だから」

冷血漢、と睨むがフィーリにはエマーの考えていることが解ってしまった。

今、ここで出て行つて夜盗を追い払っても、敗れば殺され、勝ったとしてもキャラバンに仕つく——彼らにとって夜盗は天敵だ——それこそどんな卑怯な手段を使っても引きとめられる可能性がある。

いずれにせよ、フィーリやエマーに有利には働かない。

どこかの正義の味方であれば、そんなリスクも構わず飛び出していくのかもしれないが、フィーリに、そんな蛮勇は持ち合わせが無かった。

「アンタは飛び出すなよ。目立つから」

フィーリは警告した男を怪訝に見返す。目立つというなら、エマーの方が目立つはずだ。

しかし、二人してここに潜んでいるわけにもいかない。襲ってき

た男達の目的は虐殺よりも強奪が目的らしく、次々とテントが剥がされている。混乱に乗じてキャラバン隊の一部が逃げていくのが見えた。

途方に暮れる気分でそれを見送り、フィーリがエマーに視線で尋ねる。だが、それを邪魔するように悲鳴が隣のテントで鳴り響く。若い女性のようだ。その周囲で男達の嘲笑も聞こえる。

何が行われようとしているのは明白だ。

憐れな、というよりも滑稽なほど悲鳴を上げている女の声が耳についた。

「あーもう！」

フィーリはその場を飛び出していた。エマーも渋々ついて出てくる。フィーリは声の聞こえるテントを支える縄を外した。

悲鳴が驚愕に変わる。

やがて布をかきわけて三人の男と服が乱れた女性が出てくる。

問い掛けられる前、フィーリは無言で男達を蹴り飛ばす。

いずれも急所を。

どうにもならないらしく、地面に転がってしまった男達を見下ろして、フィーリは冷ややかに足を振り下ろす。地面も抉ろうかという脚力で腹部を強打された男達は、抗いようもなく気絶した。

「……相変わらず、手加減のない制裁だな……」

哀れな男達を見下ろし、無感動な感想を漏らすエマーを無視して、フィーリは放っておいた女性に視線をやる。先ほどよりも怯えた様子だ。

「大丈夫？」

少女の声が聞こえて、一先ず安堵したのか、女性は泣きそうになりながらも頷いた。

フィーリは倒れたテントの下から薄手の上着を見つけると、女性にかけてやる。女性は少し息をついたが、複雑な表情で項垂れる。

「……キャラバンから置いていかれてしまったの……。これからどうすればいいのかしら……」

とうとう泣き出した女性を見遣って、フィーリも複雑な気分になる。

主都での自分と同じなのだ。

自分の行き場がわからなくなってしまった自分と。

だが、降ってきたのは優しい慰めではなく、無遠慮な言葉だった。「キャラバンは西に向かった。確か、この先に街があるだろう。そこへ行つたんだ」

フィーリと女性は顔を上げる。我関せずというようなエマーは二人を見下ろし、続ける。

「とりあえず、残った荷物で手持ちの荷を作ってやるから追いかけてみる」

「そんな……」

助けてやらないのか、と言いかけたフィーリの隣で、女性は顔を上げていた。

「ありがとうございます」

彼女の顔から絶望が消えた。

フィーリは言葉を継がず、エマーと女性と共に、積荷の陰へと向かった。

ことごとく奪われてはいるが、乱雑に漁っているようで、一人分の食料と着物ぐらいは用意できた。それをまとめて女性に持たせ、フィーリとエマーは野営地から少し離れた場所に女性を残した。

「朝になるまで動かないで。何があっても」

不安げ、というよりもフィーリ達を心配そうに見上げていた女性は頷くと同時に、

「私は、ジェンカと言います」

出て行きかけていたフィーリは足を止め、彼女を振り返る。

「私はフィーリ。あっちはエマー」

「気をつけて。フィーリ。エマー」

ありがとう、というジェンカの声の背に、フィーリ達はその場を離れて野営地の陰に潜む。

「……同じだと思ったんだろ」

珍しく、エマーが話し掛けてきた。

何のことだかわからず、不審顔で問い返すと、エマーは続けた。

「あの、ジェンカと自分が同じだと思ったんだろ？」

「……それは……」

目聡い男だ。

「あの女はまだ行き場があるんだ。憐れむな」

冬空のように即答する声は、心なしかフィーリを慰めるような色があった。

呆れられているのか。そう思ってエマーを見遣るが、彼の表情に変わりはない。フィーリはどう応えて良いのかわからず、ふと浮かんだ疑問を口にする。

「……あなたは、私を憐れんでるの？」

どうして。

なぜ。

疑問はつきない。

エマーは当然というように、頷く。

「憐れんでいるように見えるか？」

問い返すのは反則だ。

フィーリはエマーを一睨みして、物陰の外に視線を投げた。まだ、付け火はくすぶり、あらかた物色をし終えたらしい男達がうろついている。

「憐れんでるように見えるなら、先に謝つとく」

フィーリは動きを止めた。

そしてゆっくりとエマーを振り返る。

エマーは、といえばいつもの如く無表情だ。

フィーリは思い切り息を吸う。

宮廷楽師にも褒められたほどの肺活量だ。

「なんなのよーつつつつっ！」

注目を浴びるには、充分過ぎた。

気がついた時には、周囲には戦争中にもこれほど見たこともないほどの剣や槍が並んでいる。

「……あなたのせいだからね」

「……面倒だからそういうことにしといていい」

投げやりに応えるエマーを背に、フィーリはざっと顔ぶれを見回す。

円陣を組んではいるが、剣の構えも実に素人臭いのが揃っている。何やら口々に男達がこちらに質問やら罵声やらを浴びせてくるが、それを一切無視して、フィーリは傍らの男に尋ねる。

「どうする？」

「蹴散らして逃げる。東の街道で合流」

簡潔に告げると、エマーから先に動いた。近くに居た男が動けないでいるほど素早く、剣を取り上げる。

ついでに殴り飛ばしているので、男にとっては不運この上ない。

その様子を見て取った男達は、フィーリの方が、扱いが楽と目算をつけたらしく、彼女に殺到し始める。

フィーリもエマーに倣うことにした。手始めに槍を持っている男の顔を蹴り飛ばし、パルチザンを強奪する。

構えて振り回すと、意外な反撃に驚いた周囲の男達は散り散りになって逃げ惑う。

どちらかというと、悪党になった気分で、それでも呵責なく追い払うと、次に騎馬隊がやってきた。

馬上から剣を振り上げるが、フィーリが馬の脚を薙ぐ方が早い。

三頭ほどを打ち倒したところで、パルチザンの方が折れた。

仕方なく、いかにも重そうなハンガーを手にとり、正眼に構える。「何やってんだ！ 囲んで槍を投げろ！」

もたついた指令にしては的を得ている。だが、行方側がついていなければならない、それも愚行になる。

バラバラと投げようとする瞬間、フィーリは高く飛び上がった。助走もなく、天高く跳躍する彼女に向かって、天使だ、という者

もいた。体を捻って、飛来する槍を避けると、男達の真ん中に切り込む。今までのスピアとは違い、両刃のハンガーは手加減が利かない。一度薙ぐと、手首や指が飛び散っている。幾人か重傷者も出したかもしれない。

悪魔、と呼ばれた。

それもそうだ。血まみれの娘が巫女などとは思ってもよらないだろう。

フィーリ自身も、巫女だと胸を張ることは出来ない。

乱れた息を整えて、辺りを見回す。

知塗れで動けない者以外は、フィーリの周囲からすっかり男達は退散している。

エマーを探して、視線を彷徨わせていると、声かと見間違っほどの殺気が背中から飛び込んでくる。

振り返って剣を突き出すと、一人の男が目を見開いていた。

だが、驚きも束の間、男は手にしたサーベルでフィーリのハンガーを払う。

甲高い音で、フィーリは改めて構え直した。

この男、斬り合いがしたいらしい。

声もかけずに跳躍する。

逆袈裟と袈裟斬りがかち合い、一合、唐竹を払い落として二合、そのまま背中を切る振りをして、一直線に突く。

それを後方に跳んで避けた男は苦笑を漏らす。その喉元には一筋の血が流れている。

「……そこで突くか」

普通なら切り結ぶところだ。だが、フィーリはそれを嫌って突き返したのだ。

実を言うと、フィーリが持っているハンガーはすでに切れ味が無いに等しい。薙ぐ、突くぐらいならスピードを乗せればどうにでもなるが、斬ることはできない。スピードを乗せなければならぬが、それすらも血脂で鈍ってきている。

新しい剣に持ち帰ることも考えたが、この眼前の男が許してくれ  
そうもない。

となれば、手段は限られる。

「あ、逃げるな！」

フィーリはハンガーを捨てて敵前逃亡を謀る。阻む敵を蹴り倒し、  
燃えるテントの隙間を逃げ回る。

しかし、それはあまりに無策だったらしい。フィーリの方がテント  
の密集地に入り込んでしまい、結局囲まれてしまう。

どう打開しようか考えていると、制止の声と共に馬蹄の音が響い  
た。

困惑する男達を掻き分けてやってきたのは、日に焼けた顔の青年  
である。その隣には、

「……何やってんのよ。エマー！」

気合無く両手を上げたエマーが無愛想に立っていた。

## 7 依頼

柔らかそうな羊毛の上に座られ、スープと小麦のパンが乗った小綺麗な食卓を勧められた。確かに空腹は覚えていたが、食事に手をつけることはせず、はす向かいと正面に座している男達を睨んだ。すると、気付いた正面に座す青年が人の良さそうな笑みを向けてくる。

「どうしたんだい？ 何か嫌いなものがあつたかな」

明らかに子ども扱いされ、フィーリは嘆息した。フィーリが今、着せられている服も、何処か良家のお嬢様が着るようなワンピースだ。ふわりと広がる長い裾に、袖や襟に最高級のレースがあしらわれた高級品である。

薄汚れた旅装は返り血で余計に汚れて、外へ着ていける品ではなくなっていたが、こんなものを着せられるいわれは無い。

フィーリははす向かいで優雅に酒を飲んでいるエマーを睨む。

こんなことになってしまったのは、この男の全責任なのだ。

フィーリは何もわからないまま、ゲルという広い、テングローのようなテントの集落に招かれた。その一角で湯浴みをさせられ、ワンピースを着せられた。そして連れてこられたのが、この食卓だ。

通りがかりの善意なら、喜んで目の前のスープを平らげにかかるが、ここへ連れてきたのは他でもないキャラバンを襲った夜盗である。

逃げ場を失ったフィーリはすでにやる気をなくして捕まっていたエマーとキャラバンから奪ったのだろう積荷と一緒に馬車に乗せられたのだ。揺られること小一時間、夜明けも近い頃に山間の小さな空き地に下ろされた。それが、この集落である。

先ほどからエマーに向かって説明しろ、と念を送っているのだが、それは無駄だとフィーリは悟り、自分で質問することにした。

「……あの」

「ああ、そうだ」

褐色の青年はにこやかに頷いた。

この青年、よく見れば帝国では見たことの無い銀髪である。肩より伸ばした髪を無造作に首の後ろでまとめている。切れ長の瞳は、至上の色とされる深い青紫だった。容貌には節々に品の良さが表れる。武骨な旅装姿でなければ、その容貌が際立ったことだろう。

「自己紹介がまだだったよね。僕は、ツアン・イー。この集落の族長やってるんだ」

エマーの十倍は愛想のいい笑顔だが、フィーリはそれを睨むことで返す。

「夜盗の、でしょ」

ツアンは苦笑した。

「まあね。ああ、でも今日は依頼があっただよ」

「……依頼？」

返答したのが良かったのか、ツアンは丁寧に応えた。

「そう。とある筋から、あの隊商を襲えってね。まあ、色々黒い噂のあるキャラバンだったから」

と、ツアンは傍らに積み上げている強奪した荷の一つから袋を取り出す。中を開けてフィーリに見せると、平然と言い放つ。その白い粉にはフィーリも見覚えがあった。未熟な巫女が、自分の舞を急に上達させるために使ってしまうことがあるのだ。

「麻薬だよ。戦後の混乱に乗じて売り捌こうとしてたんだね。末端価格でミリグラム、万単位の値がつくから」

エマーを見遣ると、この男はふと気付いたように視線を返す。

「あ……。教えてなかったっけ？」

本気で殴りたいと衝動が起こった。だが、フィーリは長年培ってきた堪忍袋にきつちりとそれを収めておく。いつか巡ってくる時のために、温存しておくべきだ。

「……じゃあ、ジェン力を逃がしたのは失策だった？」

「いや。こんな荷の正体を知ってたのは、一部の人間だけだろう」

下働きらしいジェンカは殺されていない確率が高い。フィーリは少し息をつく。そして改めて男達をねめつける。

「……でも、あなた達が投合する理由には弱いわ」

ツアンとエマーは顔を見合わせる。だが、エマーは説明する気はないようで、すぐに濁酒へと注意を移す。

残されたツアンは肩を竦めてフィーリに向き直った。

「驚いたのは僕の方さ。だって、連邦軍にいたはずのエマーがこんな可愛い女の子連れて旅してるんだよ？」

同意を求めるように、ツアンはエマーに顔を向けるが、無関心男はぴくりとも応えない。

ツアンはフィーリに向かって苦笑した。

「しかもエマーは連邦軍辞めただって？ 確かに、エマーみたいな人にはこれからの世の中は面白くないだろうけど」

「内乱があるじゃない」

「君は怖いね」

言葉とは裏腹に、ツアンは柔らかく笑む。

「民族同士の確執から生まれる内乱ほど面白くない戦争はないよ。信念も目的もありはしないから。あるのはただの殺し合い。それだけだよ」

少し伏せた目が彼の目蓋に影を落す。

「つまらないよ。本当に」

ツアンの言葉が他人事には思えず、フィーリは顔をしかめた。

「うん。そうだな。僕も内乱を経験したことがあるから言えるんだけど、本当につまらない殺し合いだよ。昨日の晩の夜盗ごっこよりね」

あっさりと言い切って、ツアンはにっこりと笑う。

「そういえば、内乱の時に、エマーと会ったんだよ。もう十二年ぐらい前になるかな」

と、確かめてくるツアンに、エマーは「ああ」とだけ相槌を打った。「鎮圧部隊として来ていたエマーに負けて、助けてもらったんだ」

「……敵、だつたんじゃないの？」

「そのはずだつたんだけどねえ」

怪訝に問い返すフィーリにツァンは苦笑して頬を掻いた。

内乱は、規模自体は小さいとはいえはつきり言って戦争よりタチが悪い。怨嗟の応酬なので収拾のつけどころがないのだ。そんな敵も味方もわからない場所で襲ってくる相手を助けてやろうといううな余裕がどこから生まれてくるのだろうか。

だいたい、フィーリを連れて旅をしていること自体も神経回路の接触具合を疑ってしまう。

エマーのことだ。どうせ成り行きや気まぐれで助けたのだろう。そう考えれば、フィーリにはツァンに尋ねることがもうほとんどないように思えた。

「それで、どうしてここに連れてきたの？ 昔を懐かしんでつい連れてきたわけじゃないんでしょ」

「話が早くて助かるよ」

そう前置いて、ツァンにはっこりと微笑む。

「卓上ゲームは好きかな」

## 8 事実

文献や資料だけで知識は埋まるわけではない。  
フィーリはそれを実感していた。

この断崖絶壁の崖から望めるのは二次元の蒼。  
どこまでも一線を引く蒼と青が凪いでいる。

空の真向かいにたゆたうこの広い湖を、人は海と呼ぶ。  
「行くぞ」

声をかけてきたのは、フィーリよりも少し年上に見える少年である。

色素が元々薄いのか、淡い金髪に生白い肌は日に焼けた気配がない。

野戦服を着ていても、まだ学生のような少年にはひどく不似合いだった。

フィーリは少年に従って、絶壁より少し内側の森に入る。森といっても、人の足に均された道が縦横に走る森である。

海と山が隣接する地形のここは、理想的な港として知られている。実際、森を抜ければ巨大な港都市が見える。

そんな街の手前で人の目をはばかるように森に潜んでいるのは、一筋縄ではない理由があるからだ。

森の中心部には小さなテントが張ってあった。見張りの、やはりまだ若い少年が野戦服姿でテントの前に立っている。こちらに気付くと、テントの入り口に向かって目配せする。

金髪の少年についてテントに入ると、すっかり顔見知りになってしまった中年の男と見慣れた顔がテーブルに地図を広げている。

「フィーリ。海はどうだったかな」

フィーリに気付いて顔を上げたのは中年の男だった。

「ありがとう。ミヤンダさん。面白かったわ。海って幾ら眺めていても飽きないのね」

フィーリの感想に、中年の男は日に焼けた顔を綻ばせた。元々、彼は船乗りだったらしい。本来ならば、こんな場所でコマを片手に地図とにらみ合っただけでいいはずなのだ。

「……とりあえず、補給部隊を潰しておくべきだろう」

中断したらしい話を再開させたのは、エマーだ。

彼は街の港部分をコマで指す。

「部隊を分散する必要はない。動きを気取られる可能性がある。…

…そうだな。俺に二人ほどもらう」

中年の男、ミヤンダは頷く。だが、フィーリに向かって視線を送る。この娘に聞かれてもいいのか、というようだ。

「コイツは俺が連れて行く。一応、ボディ・ガードだしな」

「……しかし、こんなお嬢さんが？」

「腕は立つ。今、ここで見せてやるわけにもいかないが」

二人の会話を聞きながら、フィーリは内心溜息をつく。

東に抜ける街道の先に、大陸の端にあたる港街がある。連邦同盟国の一国と帝国と隣接するこの街は、戦争時には重要な拠点だった。そう話して聞かせたのは、もちろんエマーである。更にツァンの話よれば、帝国が抑えていたこの港を元々の領主に返還することで協力をとりつけたのが、エマーだという。

そんな、縁の薄い場所ではない街で暗躍行為などやってもいいのだろうか。

ミヤンダと話を終えたエマーに尋ねると、彼は頭を掻いただけだった。

「もう話してあるから、ある程度は平気だろう」

「……そんなことだろうとは、思ったけどね」

ツァンが言い出したのは、この東の連邦国で起ころうとしている内乱を止めることだった。

不可抗力とはいえ、ツァンの手勢を減らしてしまったフィーリ達に、自分の仕事を手伝えと要求してきたのだ。ツァンは元々、内乱を止める依頼を、とある筋から依頼を受けて夜盗まがいのことやテ

口まがいの活動を手伝っていたらしい。それが、思わぬ伏兵の出現で怪我人を出してしまった。このままでは仕事の進行にも差し障りがある。

と、他にも口八丁のような理屈をつけられて、結局、フィーリとエマーはツァンに紹介された反乱組織のメンバーに加えられてしまったのだ。外部からの仮メンバーなので、組織の指令系統と顔を合わせることはないが、ツァンの紹介ということもあって、フィーリ達の待遇は悪くない。

(……それより、私はこんなところで何をやってんのよ……)

ダガーや、破壊工作用の爆薬などを手渡されながら、フィーリは内心独りごちる。

帝国の主都を出てから、すでに三十日余りが経とうとしていた。見ず知らずの軍人に連れられて、聞いたことも無い街へ行き、今度は何のかかわりも無い内乱の手伝いをしている。

真つ当な市民がどうやって転がれば、ここまでたどり着けるのか。フィーリには予測もつかない出来事ばかりだ。

「とりあえず、野戦服はやめてもらおうか」

エマーが指示を出しているのは野戦服の少年たちだ。ミヤンダが差し向けたエマー達の護衛に、この二人を推薦してきたのだ。

何とか理由をつけて普通の目立たない旅装に装備をつけることを納得させたフィーリとエマーだが、少年二人はそうはいかない。

組織の中でも腕利きだという二人だ。先ほど、フィーリを迎えにきた金髪の少年と、テントの前で見張りをしていた少年である。

「普段着でも何でもいいから、目立たない服を着ろ。武器も護身程度でいい」

少年たちは頷くだけで応える。

年頃の少年にしては口数の少ない二人だ。エマーと張り合えるほどこしか口を開かない。

エマーもそれ以上の指示は与えず、少年たちをテントから追い出した。彼らの気配が消えてから、エマーが始めて嘆息した。

「面倒だな」

「嬉しいんじゃないの？」

フィーリも投げやりに応えると、エマーはわざとらしく肩を竦めた。

「面倒臭いだろうが。明確な敵がいるわけじゃないんだ。やりにくい」

フィーリは目を細めた。

隠れた敵がいる。つまり、内通者がいるかもしれない、ということだ。

確かにやりにくいことこの上ない。フィーリ達の目的は内乱を成功させることではなく、内乱を止めることにある。もし、フィーリ達の動きがばれるようなことがあれば、敵味方から命を狙われる羽目になるのだ。

「……最悪」

苦い顔でうめいたフィーリに向かって、珍しくエマーが同意を示した。

「とつとと終わらせるか」

「できる範囲なら手伝うわよ」

乗ってしまった船だ。せめて良い方向に向けようとする努力は惜しむべきではない。

フィーリの諦め具合が伝わったのか、エマーはたった一つだけ告げる。

「じゃあ、アンタは俺から離れるな」

## 9 真実

夜を待つて、少年たちと四人で街に入った。わざと人の多い場所に入り込んでから、裏道を抜けて港の荷卸場に忍び込む。

ここに敵へ補給される荷が隠されているという。フィーリにはあまり興味が湧かなかったので詳しく聞いてはいないが、少年たちの言う敵、というのは、かつては同じ民族だったという。しかし、政治的な確執から民族紛争の末に分裂。戦争時代には帝国と連邦に分かれて戦ったらしい。その戦争も終わってしまったので、今度は自分たちで戦争を起こそうというのだ。

はつきりいつて迷惑な話だ。

その民族とやらがどれほどの意義をもつか知らないが、関係のない人間を巻き込むようなマネだけはしてほしくないものだ。殴りたければ、武器なしで殴り合えばいいのだ。痛いのは自分だけである。

だが、この民族内乱は確執だけでは片付かないようだ。

少年たちは帝国側について戦っていた西の勢力だったらしいが、その敵である東の勢力に強力なスポンサーがついたらしい。

今、妨害しようとしているのは、そのスポンサーから出されている荷なのだ。この港は今、中立の立場をとっているので、こうしたテロの温床になりやすい。

「薄汚い奴等の考えそんなことだ」

アランと名乗った金髪の少年は、フィーリと似たりよったりの旅装姿である。

「東の奴等は、俺たちに勝つためならどんな汚い連中とでも付き合う」

見張りの少年はデュークと言った。

少年たちの感想を聞きながら倉庫の鍵を調べていたフィーリは嘆息する。

（五十歩百歩）

やってることはあまり差がない、という何処かのことわざがぴったりにくるだろう。

倉庫の錠を、ツァンから預かった鍵であけると、静かに中へと入る。

うずたかく積まれている木箱には、薄闇の中で、辛うじて見える大きなペイントは食料や武器などと表記してある。中には植物の種や衣服、靴などもあるようだ。

「ホントにここなの？」

エマーに尋ねるが、彼は応えず、手近な木箱のふたを壊した。そして、何やら物色しはじめ。靴と記された箱だったらしく、放り出されるのは野外用の安全靴ばかりだ。

「ちょ、ちよつと……」

咎めたフイーリの眼前に、ずいと紙包みを差し出す。思わず、受け取ると、エマーはその包みを開いた。

表れたのは白い塊だった。ちょうど角砂糖を大きくしたような塊は、細かい粒子の粉を噴いている。

フイーリはその粉を指先につけて匂いを嗅ぎ、身を引く。

「麻薬……！」

アラン達も寄ってきて、細かい粒子を見遣る。

「……そんな……。これはっ……」

デュークがうめいたその矢先、突然倉庫の明りがついた。

暗闇に慣れていた目に眩しく光るものが映る。

積荷の高みからずらりと並んだクロスボウだった。

見知らぬ男達の中に、見知った野戦服を見つける。こげ茶色の、連邦軍章をつけた野戦服である。それを身に付けているのは三十路にさしかかろうというほどの男と中年の男。中年の男に見覚えがあった。

昼間、エマーと話していた、ミヤンダという男だ。

彼は煩わしそうに顔を歪めて、積荷の上からこちらを見下ろす。

「み、ミヤンダさん！ これは一体……！」

動揺も露に叫んだのはアランだった。彼らはミヤンダにスカウトされて戦場を渡ってきたのだ。フィーリ以上に困惑している。

息子同然に可愛がつてきたはずの少年達に向かって、ミヤンダは慈悲の欠片も無い嘲笑を寄越した。

「ようやく網に引つ掛かつてくれたようで、嬉しいよ」

嘲笑ったのは、少年たちに向かってではなかったらしい。応えたのはエマーだった。

「そうか」

「……エマー」

説明しろ、と睨むと、彼は片眉をあげた。

「こういうことだ。連邦の同盟国、テグリスが民族紛争を利用して麻薬を捌いていた、てな」

エマーはフィーリから麻薬を取り返して、丁寧に包み直した。

「船で迂回させて密かにこの港へ運び込み、精製したものをキャラバンに運ばせる」

数日前ツァンが襲ったキャラバンのような輸送部隊が各地に派遣され、闇市に売り捌くのだ。

ツァンがキャラバンを襲った理由がここにあった。

包みを片手で弄びながら、エマーにしては珍しい、人の神経を逆撫でするような嘲笑を高みの見物人たちに向けた。

「ツァンの読みは当たったらしい」

「ほざけ！」

もう一人の連邦軍の男が一喝する。

「貴様が何者かはしらんが、運が悪かったな。ここの秘密を知ったからには、ネズミだろうと生かしてはおけない」

「ミヤンダさん！」

アランたちはミヤンダに悲痛な声をあげるが、彼は冷やかな視線を投げただけだった。

「お前たちはよく役に立ってくれたよ。あと半年後ほどの民族紛争

終結記念日とやらに立つ慰霊碑にはきちんと名前ぐらいは入れておいてやるう」

「！　どういふことなんですか！」

「デューク。いつも言っているだろう。少しは頭を使え、と」

冷笑してから何か思い直したのか、ミヤンダはクロスボウを構えた兵士達を少し下がらせた。

「まあいい。お前には薬の実験に妹をもらっているからな。礼として教えておいてやるう」

有利に立った者特有の高圧的な態度でミヤンダはデュークとアランを見下ろす。

「もうとつくの昔に東テグリスと西テグリスは紛争終結条約を交わしているんだよ。その男が言っただろう？　ただの“テグリス”と」

促されるように、少年たちはエマーを凝視した。

「国際的に見れば、周知の事実だよ。まあ、情報ネットワークから切り離れた生活を送っていたお前達には知る由も無かっただろうが」

「……本当ですか……？」

頼りなくエマーに尋ねたアランは今にも陥落する城の主のようだった。

問い掛けられたエマーは顔をしかめるように目を細めた。

「本来なら、六年前に内戦は終結しているはずだった。条約が締結されたからな。だが、戦争中も西と東に分裂したままだった。戦争中は帝国という大きな敵がいたから、どの国も反乱組織が勢力を拡大した、ぐらいにしか考えず干渉しなかったんだ。それが、このザマだ」

エマーは視線でミヤンダを指す。

「テグリスは温暖だが開発地域の少ない国で、貧しかった。手っ取り早く稼ぐには、こういう麻薬は打ってつけなんだ。戦時中は、こういうドーピングを打ちたがる奴なんて腐るほどいるからな。味が忘れられなくて、麻薬中毒者になる奴も多い」

「……そんな……。妹は…家族は皆、この白い粉がただの薬だと思  
っていたのに……」

デュークがうめいた。

「気を落さなくてもいい」

光明をもたらすようにミヤンダが口を挟む。

「まだ生きている。……まあ、内臓の五十パーセントは売られてしま  
って、延命装置に繋がれてはいるだろうがね」

「……この……！」

フィーリは持っていた爆薬を手にする。だが、それはエマーに押し  
留められる。

「何を……」

それを問う前に、デュークが一足飛びに積荷の上へと跳躍するの  
が見えた。異常な跳躍力は特殊な訓練を受けていた証拠だ。

「駄目よ！」

叫んだのが早い。

いや、遅かった。

デュークの体を多過ぎるクロスボウが刺し貫いた。

五メートルは高さのあった空中から、一気にデュークは滑り落ちる。

フィーリはエマーを置いて、アランと共に駆け寄る。

デュークは気を失ってはいたが、幸い、右大腿と左上腕以外にク  
ロスボウは刺さっていない。フィーリは慎重にクロスボウを抜く。

本来なら、傷の手当ての時に矢は抜くべきではないのだが、毒を塗  
つてある可能性が高い。アランが急いで用意した血止めのシートを  
貼り付ける。

不意に、大量の矢が放たれる気配がフィーリを襲う。

顔を上げたときには既に遅い。

何本か矢を受ける覚悟でコンバットナイフを抜く。だが、急に頭  
を小突かれて機を逸してしまう。

ざあっと大雨のような音と共に、風の衝撃が襲ってくる。

しかし、それは体を突き刺さる衝撃ではなく、突風だと知る。

わずかのあいだ閉じた視界に、何時の間にかエマーがいる。その手にあるのは、フィーリが抜いたはずのコンバットナイフだった。辺りを見回すと、ちょうどフィーリ達四人を切り取るように黒い矢が散らばっている。

無茶をするな、と怒られるのかと思えば、エマーはコンバットナイフをフィーリに返して、デュークの体を背負った。

「応急処置はしたな？」

「あ……はい」

茫然と応えたアランに頷き、端的なかつこの場で最も有効な命令をエマーは下す。

「逃げるぞ」

大きくも威圧的でもない言葉で、フィーリ達は体を反転させた。

ミヤンダと三十路男の怒号とクロスボウが追い討ちをかけてくる。

それを右に左に避けながら、倉庫の外へと転がり出る。そのまま街に出るのかと思えば、エマーは港のさらに奥へと駆けていく。

「エマー！ この先に何かがあるの！」

倉庫の先にはただの船が停泊する港しかない。

仕方なく追いかけるアランとフィーリの目に、昼間とは全く違う、何もかも吸い込んでいくような海が現れる。

さすがに立ち止まったエマーは唯一携帯していた蛍光灯を取り出し、何もない海に向かって振った。

気でも触れたのかと呆れて見てみると、後ろから複数の明りと足音がやってくる。

フィーリは向き直り、コンバットナイフを構えた。

案の定、ミヤンダ達だ。高い積荷の上からようやく降りてこられらしい。もたついているらしいクロスボウの部隊は、今、半分にも満たない。

「兵は拙速尊ぶ。じゃなかったかしら？」

焦りを隠して笑んでやると、見透かしたようにミヤンダも笑う。

「よく知ってるね。フィーリ。そんな危ないものは仕舞って、降参

したらどうだい？ 君子、危うきに近寄らず、だよ」

ただの小娘だと油断しているのか、ミヤンダはフィーリに向かつて手を伸ばしてくる。

「……呆れた君子ね」

フィーリは地を蹴った。

夜空に高く飛び上がると、慌てたクロスボウ部隊が矢をバラバラと放ってくる。

身を捻り、そのまま打った兵士にナイフをくれてやる。腕に、手に、クロスボウ本体。薙いだその先に三十路男の顔が見え、彼の喉元に小さな短剣を差し入れる。

声も無く、冷や汗を垂れ流す男を尻目に、フィーリは叫んだ。

「アラン！」

混乱に乗じてミヤンダの心臓を狙っていたアランは、フィーリの声に動きを止めた。

立ち止まった少年を見下ろし、引き攣った笑みを浮かべたミヤンダだったが、そのまま肘鉄を腹に入れられ敢え無く昏倒した。

だらしなく倒れた男の頭を蹴り飛ばし、アランは男を捕えたままのフィーリを睨んだ。そばにいる男が息を呑むほど殺気立っている。

「……何故止めた」

「そんなの殺しても、刃が脂で汚れるだけだもの。損だわ」

「損得で動くなんて……！」

「何をしていいか解らない時はね、とりあえず自分が得になりそうだなって思う方を選んでくのよ。そうしたら、あとでやりたいことが見つかった時に、上手くいく確率が増えるから。労働と損得勘定は尊いの」

きっぱりと言い切ったフィーリを半ば茫然と情けない顔で見ているアランは、やがて溜息をついた。

「……わかった」

その答えに満足して、フィーリは捕まえていた男の首に手刀を叩き込んで気絶させる。

「おー……い」

聞いたことのある間延びた声だった。

蛍光灯を振っていたエマーの前に、明りをつけた船影が見えてくる。

一艘ではない。フィーリからは少なくとも十艘が見える。いずれも客船並みの規模である。

「フィーリい」

女声だ。

夜陰に現れた船の先端に、白衣の女性が身を乗り出している。

フィーリはその、懐かしい姿を見とめて慌てる。

「危ないですよ！ ティアナさん！」

ブロンドの女性は、一ヶ月ぶりに見るティアナだった。

「ツァンと私は従兄妹でえ……」

「つまらないので、そういう言い訳はやめてください」

容赦なく、言い捨てられて、ティアナは苦笑いした。

「まあ、要するに、僕は君たちを迎えに来たんだよ」

ティアナの隣で同じように苦笑したツァンは港から望む暗い海を眺めた。

「全部、連邦は知ってたんですか？」

フィーリの問いはどちらのともなく、肯定された。

「僕とティアナは連邦に依頼されて動いていたからね」

「戦争終わると職にあぶれちゃって。暇だから内通者探ししてたのティアナの暇つぶしに発見された方はとてつもなく迷惑だっただろう。」

フィーリもツァンに倣って海に視線を向ける。

すでに十隻もの船はない。急ぎの用だからと無理に乘せてもらったらしい。しかし、ただのヒッチハイクなら十隻もの船は必要ではない。

「……ねえ、エマーって何者？」

連邦のものらしい船の兵士にミヤンダ達を引き渡していると、十隻の船の船長が勢ぞろいして、エマーに最敬礼していった。

「犯罪者って言うなら納得するけど」

ティアナとツァンは二人して顔を見合わせるが、やがてうめくように頷いた。

「いや、まあ……ある意味それよりタチが悪かったりするけど」

ティアナが視線を彷徨わせていると、不意に彼女の焦点が合う。紅い髪。その男は不機嫌だった。

「客だぜ。センス」

用件だけ述べて、肩に担いだデュークをティアナの前に降ろす。

「あら、血まみれねえ」

ティアナは話を反らせるきっかけができたのが嬉しいのか、さつさとデュークに興味を変えた。

「お前にはコイツ」

連れ立っていたアランをツァンに突き出す。物のように差し出されたアランは複雑な表情でツァンとフィーリを見比べる。

「この子は？」

ツァンもティアナと同じように話題を代えた。案外、本当に従兄妹なのかもしれない。それほど、彼らの反応は似ている。

「孤児。名前はアラン。とりあえず、兵士見習みたいなことやつてたから、薬を抜けば戦闘じゃそこそこ使えるんじゃないか？」

薬。

「エマー。それって……」

「こいつ等は麻薬を使ってる強化兵だ」

フィーリは改めてアランを見遣る。彼はフィーリの視線を受けられず、項垂れる。

「戦争してれば誰でも行き着く、安っぽい知恵だ」

エマーはアランの金髪を軽く叩くと、ツァンを見遣る。

「ちようどいいね。薬を抜くのは手間がかかるけど、人手は足りてないから。……君も、僕のところできてる気はあるかな？」

アランはツァンを少し見上げた。

「……俺には、もう国がない」

「そうだね」

ツァンは素直に頷いた。

「じゃあ、僕のところの間借りしにおいで。君には広い知識と視野が必要だ。それをあげるよ」

アランは惑うようにエマーを見上げ、フィーリを見た。

「いいんじゃない。労働と損得勘定は……」

「……尊いんだったな」

アランはフィーリに向かって苦笑すると、ツァンに頭を下げた。

「フィーリとエマーはどうするの？」

デュークを―自立型貨物機関 リフト に乗せてきたティアナが顔を出した。

「さあ？」

フィーリは首を傾げるが、エマーは片眉を上げる。

「とりあえず、このじゃじゃ馬をリベンス婆さんの家に届けてくるさ」

「リベンス老に？」

ティアナは瞬く。

「知ってるの？」

「知ってるも何も。物凄い気難しい先生よお」

脅すようにティアナは熊手を作った。

「頑固者だが、道は知ってる」

フィーリは嘆息する。

「エマーはそればかりね」

「そうか？」

聞き返してくるこの男に呆れて、肩を竦めると、ツァンが笑った。

「そう。さっきの質問の答え。言ってなかったね」

エマーは何者なのか。

フィーリが耳を澄ますと、ツァンはからかうように笑う。

「エマーはエマーだよ」

「……何だ、それは」

フィーリの返答を横からかつさらったエマーが怪訝にツァンを見返す。

「いいから。君は、フィーリを届けておいでよ」

ツァンに誤魔化されて、エマーはますます顔を歪めた。

フィーリにも無言で問い掛けてくるが、フィーリは彼がよくやるように、片眉だけ上げてやった。



## 11 指輪

人界に侵食されて久しい世界の中で、未踏の森があるとすれば、それはこんな森なのかもしれない。

霧の立ち上る野原の丘陵を抜けると、針葉樹林の森がある。

倒木に苔生す道に、確かな路面はない。そこは道であるのかすら疑うような、木々の隙間である。

天を突く木々は空をいつそう高く押し上げて、響く鳥の鳴き声は静寂を切り裂くかのごとく鋭く空気を突き刺す。

ティアナ達と別れて、すでに数日。

東の街道を抜け、帝国と連邦の稜線を望む森までやってきている。人智を拒む深い森は、何処か帝国で連邦なのか、双方が明確な境界を引きかねている完全な中立地帯である。

人里から遠く離れたこの森に、エマーの言う、道を知る人の家はひっそりと建っていた。

丸木を組んで作られた家は、苔とツタに覆われており、歳月が人家というよりも無人ではないかと疑わせるほど年季を籠めている。

戸が開いた。

呼びかけもしないのに現れたのは、一人の老婆である。白髪を綺麗に結い上げた、品の良い彼女は、棒切れのような身体に小奇麗な布を幾重にも巻きつけている。腰は折れ曲がっているものの、足元はしっかりとしており、かくしゃくさを物語っている。

「エグマ・カタスカ」

しわがれているがはっきりとした発音で、老婆はエマーを名指した。

「こんなところで何をやっているんだい。戦争は終わったんだ。お前にはまだやることが山ほどあるよ」

静かに、だが少し陰のある口調で言い終えると、次にフィーリを見遣った。

「帝国の巫女姫だね。お初にお目にかかるよ。私はリベンス・コッペリア」

フィーリはふわりと、お辞儀をした。

「フィルデルシア・トールと申します」

「うん。良い名だ」

すんなりと言われて、フィーリは少し驚いた。長年、長いと煩わしがられた名前だ。褒められるとは思っていなかった。

「じゃ、俺はここで失礼するか」

エマーは片腕を上げて、手を振る。

すでに手も届かない場所に居る。

驚かされてばかりだ。

聞きたいことは山ほどあるというのに。

「エマー」

何度呼んだかわからない。

出会ったときから、何も変わらないこの男の名前を。

呼びかければ、すぐ言葉を待ってくれる。

フィーリに目的を与えてくれる。

「どうして、私をここに連れてきたの」

「約束だから」

そして、フィーリを見遣る。

「そういえば、その指輪の片割れを持ってたな」

視線の先は、フィーリの指にある小さな環。

エマーは改めて言い直した。

「俺が殺した、あの城の主との約束だから。アンタをここまで連れてきた」

あの日、あの場所で、あの人が。

同じ日に同じ場所と同じ人が。

巫女ではないフィーリに、指輪をくれたあの人が、精一杯の誠意を籠めて言った。

「逃げろとアンタに言った後、俺にアンタを頼んで逝ったんだ。…」

…全く、人を見る目だけはありやがる」

エマーは苦笑して、これからどうする、と誤魔化し半分に聞いた時に同じように尋ねた言葉を繰り返す。

「俺を恨むか」

フィーリにとって、彼は小さな僥倖だった。

王に無理やり連れていかれそうになった時、城主の立場から彼がかばってくれたのだ。

素直になれた。

愛しいと思った。

だが、フィーリはそこまでだった。

巫女である自分に、親愛以上の情はない。

だから、愛しているといわれた時も、戸惑いだけが残った。

渡された指輪もとうとう、彼の前では嵌めないまま。

無くして初めて、幸せだったのだと気づくのだ。

それはもう届かないから。

「エマーはズルイのよ」

彼の想いを受け止めて、フィーリに気付いてくれた。

居場所を与え、目的を与え、道を与えて、フィーリの背中を押してくれた。

「私は、どれだけエマーからもらえばいいのよ。こんなにももらった、どれだけ返せばいいのかわからない」

フィーリがエマーに返せるものは何も無いというのに。

「恨みたくても、恨めない」

ふと、思い出したようにエマーは笑んだ。

「恨まないでもらえれば、それでいい」

途端に、はめられた気分になって、フィーリは泣きそうだった顔を歪めた。

「それと、あの曲の題名知ってたら教えてくれ」

今はない、リィラの旋律に乗せたあの曲の題名は、  
「知らない」

何処かに置き忘れた思い出の中にあるらしく、題名までは思い出せない。

「どうせ、誰も知らないんだから、勝手に名前つけてしまえば？」  
適当に言ったフィーリに向かって、こちらもいい加減にエマーが応じた。

「じゃ、フィーリな」

フィーリの名前を決めたときと同じ口調で。

「……どうして、私の名前になるのよ！」

「発案者だろ」

「だったら、自分の名前をつけたらどうなの！」

「自分の名前を答えてまわるのは嫌だろ」

「私だって嫌！」

どうしてこうも無責任なのだろう。

「いいじゃないか。アンタはフィルデルシアだろ」

「こんな時にわざとらしく名前を呼ばないで！」

エマーは応える代わりに、歩を進めた。

行かないで。

とどめる言葉が何故か喉に引っ掛かった。

それを残して、フィーリは叫ぶ。

「エマー！」

どうして。

何故。

このときも、フィーリは自分の問いに答えられなかった。

気付いたときには、ずっと指にはめてあった指輪をエマーに向かって投げている。

ほどよく勢いの乗った指輪を、驚いたように掴んだエマーは立ち止まって振り返る。

「それ、あげる」

エマーは心底嫌そうな渋面になった。

「いらない」

「今までの宿代とかよ。足りるでしょ」

しばらく、手の中の指輪とフィーリを見比べていたが、エマーは観念したように頷いた。

「フィーリ」

誰に呼ばれたのか、一瞬わからなかった。

自分で決めた名前のくせに、一度も呼ばなかった名前だ。

「題名思い出すまで、お前の名前つけとく」

「つけるな！ このものぐさ！」

エマーは振り返らなかった。

適当に手を軽く振って、そのまま森の外へと消えていった。

影が消えるまで見送ったフィーリに、リベンスがぼつりと尋ねた。  
「あの指輪、あんな男にやって良かったのかい？」

確かに、どうせ数日もしないうちに無くしてしまうのだろう。それでも良かった。

「どうせ、あの指輪の意味なんて知らないだろうし」

そう応えると、リベンスは啄木鳥のような失笑をあげた。

「アイツは帝国語を完璧に喋るんだよ？ 文化も詳しいとは思わなかったのかい」

言われて老婆を振り返る。だが、彼女は素知らぬ顔で笑う。

「帝国では、結婚を申し込む時に使う手段だったねえ」

「……………二つ無ければ意味がないんですよ」

二つの指輪を分かち合うことで、結婚の意を誓うのだ。

「あと二日もすれば無くしてますよ。質屋にいれるぐらいは平気でしますから。あの男は」

「まあ、それも一つの道さ」

リベンスは踵を返すと、戸をゆっくりと開いた。

「フィルデイルシア。お前さんは自分の道がわかるまで、ここで過ごすがいいさ。ヤツはもう自分の道を決めたらしいから、しばらくここに來ることもあるまい」

フィーリはふと足を止める。

やって来た道を振り返り、視界に溶けていく緑の荒野を見つめる。  
「今まで来た道が、無駄だと思うかい？」

唐突に投げられる質問に、フィーリは苦笑した。思えば、笑うのは久しぶりかもしれない。

「どれも無駄じゃない、って最近、思えるようになったところなの」  
甲高い鳥の声は呼びかけるようにつんざいて、遠い空へと抜けていった。

終

1 1 指輪（後書き）

第一部 完結

## 第二部 12 城

飛び交う言葉に呆れて、彼は頼杖をつきながら息を吐いた。脱力感と共に、疲労が体の外へと逃げていく気がした。

既に罵り合いと言っても過言ではないほど過熱した議場で、唯一、常温を保つ仮想発言台<sup>フロア</sup>が発言者の顔を淡々と挙げて並べていく。

目で数えただけでも今、口々に話しているのは約二十人居る。よほど耳の良い人物か、肝の据わった人物でなければ全ての言葉を把握することはできないだろう。

仕方なく、録音部から放たれている無数の無秩序な音声データを全て端末に取り込み、整理して文字に変換していく。誰にでも分かる連邦語である。そして、強制転送を計る。

怒声がざわめきに変わった。今まで発言者の姿だけが映し出されていたフロアに、突如として理路整然と文字群が一斉に出現したのだ。それは、今まで彼等自身が発言していた一言一句を忠実に再現したものである。中には、セクハラや民族紛争にも繋がりがねない発言も含まれていたりする。

ざっと目を通しただけでも、今日にも議会を去らなければならぬ人物は十人にもものぼった。たった五十人しかいない議会の中からこれだけの退席者を出すとなると、内外の基盤は瓦解してしまうだろう。

それだけ判断して、頼杖をついたまま、いつの間にか嵐を待つ海のように凪いでしまった議場に告げる。

「皆さんの意見は大旨分かりました」

避難訓練のサイレンによく似たベルを鳴らす。

「今日のところは閉会します」

案の定、暴風のように荒れ狂った叫喚が議場を襲ったが、それを尻目に彼はそそくさと席を抜け出した。



### 13 人々

この大陸には無数の国が存在する。乱立した部族がそれぞれに国家を主張しているのだ。その数ゆうに二百を超える。向こうの山から手前の山までという国から十以上の山を跨ぎ、巨大な港を幾つも持つている広大な国家まで形容は様々である。

習慣、宗教、言葉も違うこれらの国を無理やり合併させたり統合させたり吸収させたりして五十に代表を絞った上で、無数の国は一つの同盟で巨大な連合国となった。

それが通称『連邦』、リヴァーイング同盟連合である。

この巨大な連邦が作られたのは、ただ一つの目的を果たすためだった。

帝国の打倒である。

元々は星の数ほどある国の一つだった彼の国は、一人の指導者によって劇的な軍事的成長を遂げた。その軍事力は他国を圧倒し、あつという間に広大な大陸の三分の一を手に入れてしまった。その影響力は他大陸にまで及び、本拠を構える大陸ではまさに王だった。あらゆる流通、産業、文化を手中に収め、繁栄を極めることとなる。だが、その恩恵は大陸の他国にまでは及ばなかった。むしろ搾取の根源となったのである。この大陸の二分化は五百年の歳月を重ねた奴隷として過ごしてきた国々は、ゆるゆるとその力を溜めこんで、ついに半年前、五年を賭けてようやく帝国を打ち倒す。

すでに国として、老齢だったのである。そして、腐り果てていた。そのうちから、一人の癌すら産み出した。

その過ぎ去った栄光の名は、小国から大国へ育て上げた指導者の名前を冠している。

「エグマ」

名を呼ばれ、立ち止まる。

そう。これは自分の名だ。だが、正式ではない。あまりに長い名なので普段は略称で呼ばれている。

正式には、エミグラ―セティマ。

“光よ我に”という古い聖典の言葉である。そして、この名は皮肉なことに帝国の祖と同じ名である。つまり、エミグラ―セティマ帝国。帝国の正式名称である。

無感動に振り返ると、銀髪の男がこちらを同じく無表情に、エグマを呼び止めたときと変わらぬ口調で淡々と口を開いた。

「長老方を脳溢血で殺す気か」

一見、上流階級の子息にも見える物腰である。しかし、軍の儀式服を一分のすきも無く着こなすこの男の性格は質実剛健。だが、ジョークのわからない男ではないことは、長い付き合いでエグマは知っていた。

「あの爺さん達は長く生きすぎだ。お迎えが来ているのに無視しているんだろう？」

「だが、議会決議を掲げている以上、無碍にはできない」

「ユーゲルト。アンタは正しいよ」

ジョークはわかるが、堅物であることには代わらない。

「エグマ・カtas議長」

改まった口調で言い直し、銀髪の男、ユーゲルトの顔に影が落ちる。

議会場へと続く長い白の廊下に、午後の日差しが差し込んできたのだ。

元帝国領土の南の端、大陸の中心にある荒野を開き、建築した巨大な議政堂。その様相は一国の城塞に見える。外見だけではなく、さまざまな防衛システムに護られた実質的な要塞である。

「議長、貴方の身辺警護が私の役目です。くれぐれもお一人で行動なさいませんよう」

「嫌味はさつき、散々聞いてきた」

エグマは肩をすくめて議会場を指して見せた。

指先の議会場を一瞥すると、ユーゲルトも肩をすくめる。

「……本当に、危険なのだよ。エグマ・カラス。今や君はこの大陸を統べている。君の采配と動向で大陸の未来が決まる」

「未来を決めるのは、アンタたちだ。ユーゲルト」

そう。そのために連邦がある。

一人の指導者を冠するのであれば、帝国を倒した意味がない。

大陸を刷新した意味がない。

「俺は、何も小奇麗なスーツを着たくてここに居るわけじゃない」  
仕立て屋の<sup>テーラー</sup>スーツなど着る必要はない。野戦服で充分だ。

ユーゲルトはしばらく無愛想にエグマを眺めていたが、やがて少しだけ口の端をあげた。

「私は議長の警護が勤めだ。それ以外、興味はない」

「嫁さんの心配ぐらいしてやれよ」

「仕事とプライベートは別だ」

「ご立派」

どちらともなく廊下を歩き始めた。

「ティアナが来ている」

「ティアナが？」

意外な名を聞いて、脳裏に童顔な女魔術師の顔が浮かんだエグマは少し苦笑する。

「彼女は相変わらずだ」

ユーゲルトは珍しく息をつく。石頭の彼にはティアナの奔放さについていけない部分があるようだ。

「唐突だからな。何の用だって？」

「仕事のついでに遊びにきた、と」

「議政堂にか？ よく入れたな」

「忍び込んできたらしい」

「……なるほど。警備システムを見直そう」

長い回廊を過ぎ、緩い階段をくだる。議員達には、議政堂の中に私室が与えられている。エグマの一室は、議会場階下の廊下に行く

ドア二つ先、階段から程近い場所にある。もし、テロなどに遭った時、一般議員と共に逃げられるように、というもつともらしい理由でその中途半端な場所になった。一番奥まった広い部屋には、連邦一の領土を持つ議員がどっかりと居座っている。

幾人かの議員は議長のエグマにその部屋をあてがおうとしたらしいが、当のエグマはさっさと与えられた部屋に入ってしまったので、結局、変えられなかったのだ。

質素な自室のドアをノックすると、間の抜けた返事がかえってきた。

ユーゲルトと苦笑しつつドアを開ける。

「久しぶりだな。ティアナ」

「相変わらずー。エマー」

ばつさりと切った肩までのブロンドの童顔な女である。今はさすがに野戦場での作業ズボン姿ではないが、色気のないタイトスカートのブラウス姿である。そしてその上にいつものように白衣を着込んでいた。

彼女は二つしかないソファの一つに腰掛けて、本棚から勝手に本を出してすっかり寛いでいた。

「おお。エマーがスーツなんか着てるー」

希少動物でも観察するように眺められ、エグマはスーツの上着を脱いでネクタイを緩めた。

「議長つて大変そうだねえ。カタスの王太子つて肩書きが効いたの？」

ティアナはからかい口調で笑って、目を細めた。

カタスは、連邦の同盟を取り次いだ中心国である。そして、エグマにとっては第二の故郷でもあった。

「さあな。それより、何の用だ？」

エグマは執務机につき、ユーゲルトはドア口に立つ。が、ティアナにソファを勧められ、エグマもそれを許したので、ティアナの向かいに座った。

「相変わらず本好きだよー。エマーってさ」

ティアナは会話を進めないで、部屋中を見渡す。

さして広い部屋ではない。執務机とソファが二台で定員だ。ただ、そうなってしまうのは、壁を埋める本棚のせいもあった。割り貫きの窓以外、全てに置かれた本棚はあわせて十台ある。議事録や参考資料と共に、私物として持ち込んだ本のせいで既に本棚も飽和状態にある。床や執務机に積み上げられている本は少なくない。

「うっわ。あんな古い魔術書なんて、魔術院の古本屋でしか見たことないよ」

「その古本屋で買ったからな」

「——妙なところに行っているな」

思わずうめいたユーゲルトをあえて無視し、エグマはティアナを促す。

「ティアナ。アンタが用もないのに、俺のところに来るわけないだろう」

凡庸と本棚を眺めていたティアナは世間話の続きで口を開いた。

「ここにテロ屋さんが来るっていう情報があってねー。魔術院からの情報だから間違いはないわよ。連邦に、というかエマーの国にはお世話になってるからー」

「で、今日、急いで来た理由は？」

「あーそれはー」

と、彼女がのんびりと話し始めたところで、突然、建物が揺れた。耳をつんざく爆音付きだ。

この部屋では誰も叫びはしなかったが、外からの悲鳴と、落下した本棚の本がバラバラと異常を知らせる。

ユーゲルトは落ちてくる本を眺めて呟く。

「爆弾か」

「らしいな」

ユーゲルトの呟きに、エグマは肩をすくめてティアナを見遣る。

「……今日がテロの犯行予告日だったんだな？ ティアナ」

「大当たりー」

続いてくる爆音に舌を噛みそうになりながら、ティアナはぱちぱちと心無い賛辞を送ってくれた。

「やれやれ」

エグマは書きかけの議事録の入った端末を閉じて手にかける。そして脱ぎ捨ててあったスーツの上着に袖を通した。

「ユーゲルト。議員たちの脱出ルートは」

尋ねられる前に手持ちの端末を開いていたユーゲルトは頷く。

「全員脱出可能。議会場に束になっていたことが幸いした」

「ティアナ、他に人は？」

「もう逃がしといたー。あとは私たちだけ」

「上等だ」

三人して外へ出て、思わず足を止める。

爆発が続く中、議員たちが、まだ私室をうろついているのだ。

大方の予想を胸に、行き交う議員の一人を捕まえると、

「か、株取引証明書がまだ部屋にあるんだ！」

放してくれ、と男は運動不足の体を引きずり、私室へと向かっていった。

男の後姿を見送って、エグマは手さえ振った。

「平和だなあ」

「そんな悠長にしてていいわけ？」

さすがのティアナも少し顔を歪めている。

『……議員諸君に告ぐ』

堂内放送が、ノイズと共に発音した。

『我々は、帝国の意思を継ぐ者である。諸君等の儚い勝利はうたかたの夢の産物だ。夢は覚めるものである。我々はすでにこの小賢しい議政堂を制圧した。連邦の属国民よ。即刻、降伏せよ。そして新たに服従を誓うが良い』

「あーあ。コントロールルームがやられたらしいな」

「脱出口からの退避も遅れているようだ」

端末の画面を見たまま、ユーゲルトが少々嘆息して告げてくる。

「半年で平和ボケするわけだ」

「じゃ、どうする？ テロ屋に捕まってみる？」

やけに楽しそうに笑うティアナに、エグマは肩眉を上げてみせる。

「アンタ達とはもかく、俺は生かしちゃくれねーだろが」

「屋上へ。格納庫にヘリがある」

そう言ってユーゲルトは端末を閉じると、先行して先ほど降りてきた階段を駆け上がり始める。ティアナに背中を押されたエグマは、ユーゲルトとティアナに挟まれる形で階段を駆け上った。

議会場の真上が屋上だ。

屋上へ駆け上がると、真っ先にユーゲルトが格納庫へと走り寄った。

中途半端に開いたシャッターの隙間から格納庫へ入り込む。ヘリはその絶対数自体が少ない。魔術院と連携して生産しているために、なかなか需要と生産の折り合いがつかないのだ。ここには、一般用のヘリが調達できなかったため、軍用ヘリが五体ほどだけ鎮座している。

「ユーゲルト。アンタは退避誘導に行ってくれ」

動かせそうなヘリを見つけて、状態監査モニターのカバーを取る。隣で物珍しげに見ているティアナを尻目に、状態の確認を済ませて起動コードを緊急手段で書き換える。

「私の部下がいる。それで充分だ」

エンジンキーを探して持ってきたユーゲルトは言葉を切った。

「エグマ！」

ティアナが悲鳴のような声を上げた。

全くの勘。

ほとんど脊髄反射でエグマは危険信号へ向かって腕を突き出して  
いる。

脅威だと判断する対象に向かうというのに、急激に体は高揚する。  
腕が捉えたのは鋭い蹴り。的確に急所の首を狙った足先は、殺人

的な威力がある。

痺れる腕を振り払い、体勢を崩した相手の首を掴む。  
細い。

少し力を入れれば折れてしまうほどに。

ふいに腹に蹴りがくる気配を感じて手を放し、飛び退く。

エグマの手から逃れた人影は、何を思ったのかふと顔を上げる。

「……エマー……？」

驚きを隠せない、戸惑う少女の声だった。

聞き覚えが、ある。

エグマは目をこらした。

「お前……」

ヘリの車体の向こうに。

動きやすい作業着の軽装を身につけているが、まだほんの少女である。肩より少し長い艶やかな黒髪を首の後ろに結った瘦身は、先ほどの猛攻が嘘のようにか弱く、容貌は人形のように端正だ。だが、それを炯炯とした緋色の瞳が払拭してしまう。

記憶よりも少し背が伸びている。

代わりに髪が少し短くなっていた。

「……何やってんだ。フイーリ」

半年前、別れてきたはずの少女が、変わらぬ幼い瞳で、こちらを  
儚げに見上げていた。

## 14 再会

まさか、と顔を上げた。

眼前にいないのは見慣れない男だ。

小綺麗なスーツに手には端末。すらりとした長身で、髪は目立たない黒。年齢の判別し難い容姿だが、決して不細工ではない。むしろ整っている。かといって、特筆すべき男ではなかった。

ただ、見覚えのある、穏やかな新緑の双眸だけがフィーリを戸惑わせたのだ。

そして、眼前の男は低くうめいた。

“フィーリ”と。

「……やった。もしかしてフィーリ？」

あらあ、とヘリの影から顔を覗かせたのはいつぞやの女魔術師だった。

「ティアナさん？」

「あー。やっぱりフィーリだあ。久しぶりねえ。元気だった？」

先ほど蹴りかかったのを気にもせず、ティアナはフィーリに抱きついてきた。

「ど、どうしてティアナさんが……」

「後にしろ、ティアナ」

エンジンキーを片手に、見覚えのある銀髪の優雅な男性がフィーリ達を促した。

「だ、第一部隊長さん？」

彼は表情も変えずにヘリの操縦席に乗り込むと、後部座席のロックを外した。

「名前を言っていなかったらしいな。ユーゲルトだ」

彼、ユーゲルトは無表情に自己紹介して、乗れとティアナに指示を出す。

「事情説明はあとでもらう」

ふいに、体がさらわれる。

「な、何を――…！」

フィーリの体を抱えたのは、スーツの男である。

男は後部座席に乗り込んだティアナにフィーリを預け、自分は格納庫のシャッターを開けに走った。

「ティ、ティアナさん！ 私は…」

とつさにヘリを降りようとがくが、ティアナにがっちりと抱きかかえられていた。

「あとであとで。時間はあるから」

ヘリがゆつくりとヘリポートへと滑り出す。

駆けてきたスーツの男が後部座席に乗り込むと同時に、ヘリは離陸する。耳障りな音を遮り、スライドドアを閉じると、後部座席にもたれかかった男は疲れを吐き出すように長い嘆息をついた。

「ああもう……。アンタはどうして俺の理想を軽々裏切ってくれるんだろうな」

ティアナに抱きかかえられている手前、眼前の見覚えの無い男にお前呼ばわりされても、暴れるわけにはいかなかった。それに、フィーリ必殺の攻撃を避けてみせる男だ。迂闊に手を出してはならない。代わりに不審をこめて彼を睨みつける。

「……誰よ。アンタ」

男はその言葉に少し目をみはったが、「ああ、そうか」と納得したように自分の頭に手をかける。

男の頭がズルリと剥けた。

フィーリは息を詰まらせた。

声が出ない。

男の黒髪の下から現れたのは、一度見れば忘れられない鮮血色の髪だった。

エグマ・カラス。

半年前出会った、ふざけた軍人。

フィーリは何を言っているのかわからず、声も出ずに口を上下さ

せたが、眼前の男は肩眉を上げた。

「久しぶりだな。フィルデイルシア・トール」

皮肉げに言われて、フィーリはようやく言うべき言葉を見つけた。  
「何で貴方がここにいるのよっっ！」

「あれー？ 知らない？」

ティアナがひよいとフィーリを覗き込んでくる。

「エマーはねー」

「それよりアンタ、何でこんなところにいるんだ。リベンス老はどうした」

ティアナを遮って、エマーは珍しく不機嫌に眉をしかめた。

投げやりな質問は相変わらずだが、今日は少し怒気がこもっている。

フィーリも不機嫌に顔をしかめたが、結局素直に口を開いた。

「アンタを守りにきたのよ」

ことの始まりは十日前に遡る。

庭掃除を終えたフィーリに向かって、そのかくしゃくとした老婆は告げた。

「エグマ・カタスを守りに行っておくれ」

明日、買い物にでも行つてこいというような口調だった。

森の奥深くに建つこの家から近くの街までゆうに六時間かかる。

一日では戻れない距離である。買い物に出かけるのも泊りがけだ。

どういふことかと尋ねたフィーリに、リベンスという名の賢者は続けた。

「奴は議政堂にいるだろう。探しておいで」

次の日、フィーリは一も二もなく家を放り出され、結局、エマーを探しに森を出た。

「それが、どうしてこんなところでテロ屋ごっこをしてるんだ」  
「だって……」

議政場は関係者以外入れない。それこそテロ屋以外は。

車庫番からコックにいたるまで、そのセキュリティは神経質なほど厳しいのだ。

そこで、フィーリは昔とったキネヅカと知り合いを通してテロ屋を手伝うことになった。

そして、まんまと議政堂に入り込んだのである。

一応、理由を納得したようなエマーだったが、目を細めてフィーリを睨みつけた。

「阿呆」

「なっ……」

「頼むから心配させるな」

エマーは大きく溜息をついて、後部座席の背凭れに寄りかかる。

「……何でアンタに心配されなきゃならないの？」

「俺にはリベンス老にアンタを預けた責任がある」

「問題は起こしたくないってわけ？ 議員は大変ね！」

権力を大事にするような人種は理解ができない。

フィーリが不機嫌に言い放つと、エマーともティアナとも別の声が割り込んできた。

「議長だ」

「え？」

静かな一声を放ったユーゲルトは操縦桿を手にしたまま少しフィーリ達を振り返る。

「連邦議会の議長。それが今のエグマの仕事だ」

「議長……？」

帝国に打ち勝った連邦は幾つもの国の集まりだ。その国の代表が集まり、議会を開いた。

議政堂を建てた地にちなんでヴィーフェルト議会という。

その議長はまだ三十にも手の届かない若者だということを、リベンス老から聞いていた。

フィーリはエマーを顧みる。

彼は紅い頭をガリガリと掻いた。

ユーゲルトはなおも続ける。

「議長の前は、総司令官。その前は王太子」

およそ似合わない単語を並べられて、エマーはますます面倒臭そうに顔をしかめた。

「そういう仕事だ。エグマのスクヤンダルを待ち構えている有力者やテロ集団は幾らでもいる」

「ユーゲルト。アンタなあ……」

「知らせずに巻き込むつもりか」

苛々と口を開いたエマーを見据えて、ユーゲルトは無表情に告げる。

「リベンス老は、お前のその性格をよく理解した上で彼女を寄越した」

「……わかってるよ」

エマーは深く息をついて、フィーリに視線を移した。

スーツを着込んだエマーは別人のように品格があるが、本質は変わるものではないらしい。

「それで？ リベンス老は？」

いつものエマーだ。

フィーリもいつものように不機嫌に応える。

「アンタを連れてこいって」

視線を逸らしたフィーリの目に入ったのは、青いだけの空だった。

## 15 追憶

その男は、その身にふさわしい清らかな床に膝をつかされ、静かに眼を閉じていた。

同じように静観していたエグマに向かって、兵士たちは最敬礼した。

その異変に気がついた、膝をつく男はゆっくりと、だがはつきりと眼を開いた。

「初めまして」

笑顔でこちらを出迎えた。

エグマをくわえていた煙草を携帯灰皿に投げ入れ、極めて丁寧な礼を返した。

「このような待遇を申し付けましたこと、大変おわび申し上げます。リヴァンダル卿」

まだ二十をいくつか超えたほどの歳若い城主である。エグマとそう変わらない歳だというのに、彼は荒事とは決して慣れあえない優雅な物腰で、世間知らずな笑みを浮かべている。

帝国で最も美しいと称されたリヴァンダル城。この城を代々守り引き継いできたリヴァンダル家は、帝国建国当初の戦における功績を認められ、手厚い保護のもと、生き延びてきた名門である。

「私は、この城の主、フレンダ・リヴァンダルだ。初対面で申し訳ないけれど」

温室培養の貴族が話し始めた言葉は完璧な連邦国語だった。

「先ほど貴方がたが捕えた巫女を逃がしてはもらえないだろうか」「ご心配なく。彼女はすでに自力で逃げ延びましたよ」

エグマが応えると、フレンダは首を振った。

「いや、彼女は戻ってくる。だから、二度とここには戻ってこないように、元帝国領内から逃がしてほしい」

王はすでに死んだ。

エグマの部隊が城を包囲すると、ほどなく側近たちは投降してき  
た。

しかし、その隊列の中に王が紛れていた。替え玉のつもりだったの  
だろうが、王の顔を知っているエグマには無意味だったのだ。

側近たちの他に城に残ったのは美しい女たちやコックだけだった。  
それでも戦ったのが、このフレンダである。だが、戦いを知らぬ世  
間知らずが勝てるほど、エグマの部隊は生易しくなかった。ほどな  
く彼は捕えられ、エグマの前で膝をついている。

「彼女は巫女だ。利用価値はあるだろう。だが……」  
フレンダは澄んだ碧眼を細めた。

神官や巫女は矜持が高い。帝国主都で神官たちの抵抗が続いてい  
ることはエグマも伝え聞いていた。

「彼女は…… フィルデルシアはまだ十六歳で、自由を得るべきだ」  
巫女と城主が疎開先で出会う。それから閉鎖的空間、恐慌状態で  
よく起こる症状だ。

さきほど火のように鮮烈な飛び蹴りをエグマの部下に放っていた  
華奢な少女を思い出す。確かに美少女と称しても良いほど、整った  
顔立ちの娘だ。若い城主も夜会に出ればさぞモテたことだろう。

エグマは、自分とは極めて反対の立場にあるこの優男に興味を抱  
いた。

「少し、時間をいただけませんか」  
フレンダを連れ出すことにした。

温室の中庭に誰もいないことを確認して、エグマはそばにあった  
ベンチに座す。

「——懐かしい」  
思わず漏らした。エグマは幼い頃、父とともに訪れたことがある  
のだ。

「——私は、あなたを知っていますよ」  
フレンダは笑ってガラス越しの曇り空を眺めた。

「先代のウルティア大帝が私の父に引き合わせた鮮やかな赤い髪の

少年……。エミグラ―セティマ皇子」

エグマは黙って瀟洒な植物たちで固められた温室を眺めた。

「お母上のご不幸で、カタスに引き取られたと聞き及んでおりまして」

フレンドはエグマを振り返る。

「生きておられたのですね。よくお戻りになりました。——おかえりなさい。あなたの生まれ故郷へ」

そう微笑んで、フレンドは眼を閉じた。

エグマもつられるように笑んで、ずっと決めかねていたことを決心する。

「リヴァンダル卿。あなたにここから逃げていただきたい」

エグマは驚くフレンドを見つめた。

「幸い、ここへは私の直属の部隊しか来ておりません。私の気まぐれには慣れている」

「そ、そうはいきません……」

「卿。あなたには望む未来がある」

あの巫女姫と生きたいという未来への望みがあるはずだ。

フレンドは少し黙ってから、ぽつりと話し始めた。

巫女姫との出会い、危なっかしい巫女との日々、惹かれあう過程をかいつまんでエグマに話した。

「あの気の強そうなお姫様を抱いてみたいと？」

フレンドは顔を紅くして首を振る。

彼は銀の指輪を取り出した。

「私は彼女に結婚を申しこみました。——指輪を受け取ってはくれませんでした。しかし、彼女にとって人を愛するということは神が信者を愛するかの如く、陶然と、均一なのです」

巫女は常に、一貫した人への接し方を求められる。彼女等の真に愛すべきは、神なのである。年若く巫女になっているのだから、物心つく頃から刷り込まれた意識を変えるには時間がかかるはずだ。そう。

城主と巫女の二人には時間が足りなかったのだ。時間さえあれば、確かに互いを愛し合って生きていける。

「子供はいつか成長し、あなたの心をわかるようになる。あなた方に足りないのは、ただの時間だ」

話し終えたフレンドに、エグマは静かに続けた。

「今の私には、あなたに時間を与える権限がある」  
ふ、とフレンドは笑った。

「では、あなたは私に彼女が愛を返してくれるまで待ち続けているというのですか？」

エグマは、息を呑んだ。

「私には、その胆力はない。彼女が私の愛に応えてくれるまで待ち続けていられるような……そんな身を焦がすようなことに、これ以上耐えてられない」

繊細な若者が、崩れるような笑みを浮かべる。

それは、崩れていくこの城の運命を物語っているようでもあった。  
「私は彼女が私だけを愛さないことに耐えられない。ですから、彼女と二人きりになれば是が非でも彼女に私だけを見ることを強要するようになるでしょう。どんな手を使っても。私がこれから犯すであろう、彼女への仕打ちをとどめるには、恐らく死ぬことになる」

澄んでいる瞳は生気のないガラス玉のように見えた。

「ならば私は今、死ぬことによって、城と運命を共にした主として死にたい」

「リヴァンダル卿……」

「皇子。私は帝国の申し子ですよ。常に滅びを見つめ、腐り行くわが身をただ静かに見守っている。朽ちながら生きてきた私は、少しだけ、あなたと価値観が違うのです」

フレンドは真っ直ぐ、だが何処か虚ろにエグマを見つめる。

「私は、今、このとき死にたい」

人は彼を狂人と呼ぶのだろうか。

沸いた疑問に応えを出せないまま、エグマは彼の望みを叶えたい

と願った。

「——わかりました」

「ありがとう」

フレンドは微笑み、

「彼女をお願いします」

エグマの手に銀の指輪を、恐らくエンゲージリングの片割れを乗せた。

「これを巫女に？」

「いえ。これはあなたに」

不思議そうな顔をしたのだろう。

フレンドは笑う。

「あなたなら、彼女と幸せになれる気がします」

エグマは呆れて肩をすくめた。

「あなたの天啓を信じる信心深い男に見えますか？」

「いいんです。信じていただかなくても。多分、ここで死ぬ私は、彼女の心の奥深くに残るでしょうから。今の私には、それで充分すぎる」

激しい嫉妬も、今はただ、深い愛情に見える。

「あとは彼女の…… フィルデイルシアの幸せを願うだけなんです」

「—— 幸せ云々は別にして。彼女のことはわかりました。卿のおっしゃるとおり、責任をもって帝国から連れ出しましょう」

「彼女のことは、普段、私はフィーリと呼んでいました。だから、あなたもそう、呼んであげてください」

それから、とフレンドはエグマに向かって照れるように笑った。

「私のことは、フレンドと呼んでください。できれば、友人になつてくれると嬉しいけれど」

城の、冷たい床に横たわった体は苦しげにあえいでいた。

ユーゲルトが用意していた毒を、フレンドがあおったのだ。

城主は毒を飲んで自決した。そう報告するためだ。

ユーゲルトは誰も手をくださないよう、部下を下がらせ、エグマも遠ざけようとしたが、エグマは苦しむフレンドの傍らに立っていた。

フレンドは苦しむ息の中でエグマを見上げ、笑う。

「……エグマ……。あとは……」

エグマは自分のコンバットナイフを引き抜いた。

「エグマ！」

ユーゲルトの叫び声は遠く聞こえた。

フレンドも突然の騒ぎに眼を見開く。

「——友として、最初で最後にしてやれることだ。フレンド」

これ以上苦しまないよう。

フレンドはしばらくエグマを見つめて、眼を閉じる。

その半瞬後、エグマはナイフを振り下ろした。

森で捕まえたフレンドの巫女姫は、どうにも気性が荒く、手のつけようがなかったが、エグマには手負いの獣に見えた。

時折見せる、深い心の傷はフレンドが彼女の記憶に一生消えることのない澱となって沈殿していく過程だ。

傷心の巫女の面倒をみるのは、とても神経を使い、とても興味深いものだった。

日々が発見に満ち、緩やかに過ぎていく。

それは戦争という他者を支配する世界とは違う、穏やかな時間だった。

ふと考える。

この少女を無事に導くことができれば、エグマ自身が癒されるのではないか。

そして自答する。

この淡い光のような日々を過ごすことで、多くの罪を風化させることができた。死は償いではなく、生きた結果はいつか必ず訪れる死の瞬間にわかる。

フレンダが残してくれたエグマへの穏やかな時間は、否応なく彼への感謝と、自己肯定を促した。

やがて少女との緩慢な時間を終えて、エグマは再び、身を引き裂く戦場へと戻る。

今まで考えもつかなかった、確かな望む未来を願って。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8100k/>

---

フィーリ

2010年11月12日00時10分発行